

平成 26 年度共通教育実施機構会議 活動報告書

I	「共通教育実施機構会議」活動の総括	共通教育実施機構会議常任委員会	1
II	カリキュラム等編成部会		
1	カリキュラム等編成部会のまとめ	カリキュラム等編成部会長	6
2	大学基礎論分科会	大学基礎論分科会長	7
3	課題探求実践セミナー分科会	課題探求実践セミナー分科会長	11
4	学問基礎論分科会	学問基礎論分科会長	12
5	人文分野分科会	人文分野分科会長	13
6	社会分野分科会	社会分野分科会長	14
7	生命・医療分科会	生命・医療分科会長	16
8	自然分野分科会	自然分野分科会長	17
9	外国語分科会	外国語分科会長	20
10	キャリア形成支援科目分科会	キャリア形成支援科目分科会長	—
11	スポーツ・健康分科会	スポーツ・健康分科会長	21
12	日本語・日本事情分科会	日本語・日本事情分科会長	22
III	自己点検・自己評価部会		
1	自己点検・評価活動の全体的状況	自己点検・自己評価部会長	23
2	大学基礎論分科会	大学基礎論分科会長	7
3	課題探求実践セミナー分科会	課題探求実践セミナー副分科会長	34
4	学問基礎論分科会	学問基礎論分科会長	—
5	人文分野分科会	人文分野副分科会長	36
6	社会分野分科会	社会分野副分科会長	—
7	生命・医療分科会	生命・医療副分科会長	44
8	自然分野分科会	自然分野副分科会長	—
9	外国語分科会	外国語分科会長	20
10	キャリア形成支援科目分科会	キャリア形成支援科目分科会長	—
11	スポーツ・健康分科会	スポーツ・健康副分科会長	47
12	日本語・日本事情分科会	日本語・日本事情副分科会長	52
IV	FD部会		
1	FD部会の活動報告	FD部会長	53
2	大学基礎論分科会	大学基礎論副分科会長	7
3	課題探求実践セミナー分科会	課題探求実践セミナー副分科会長	54
4	学問基礎論分科会	学問基礎論副分科会長	55
5	人文分野分科会	人文分野副分科会長	58
6	社会分野分科会	社会分野副分科会長	—
7	生命・医療分科会	生命・医療副分科会長	59
8	自然分野分科会	自然分野副分科会長	60
9	外国語分科会	外国語分科会長	20
10	キャリア形成支援科目分科会	キャリア形成支援科目分科会長	—
11	スポーツ・健康分科会	スポーツ・健康副分科会長	61
12	日本語・日本事情分科会	日本語・日本事情分科会長	22
V	広報部会		
	広報部会のまとめ	広報部会長	62
VI	カリキュラム等開発部会		
	カリキュラム等開発部会のまとめ	カリキュラム等開発部会長	64

発行 平成27年6月

高知大学共通教育実施委員会（委員長：大石 達良）

〒780-8520 高知県高知市曙町2丁目5番1号

I「共通教育実施機構会議」活動の総括

共通教育実施機構会議常任委員会

委員長 大石 達良

1. 共通教育実施機構会議及び常任委員会について

(1) 共通教育実施機構会議

共通教育実施機構会議は、計 7 回(5/28、7/29、10/30、12/11、1/28(メール会議)、2/10、3/24)開催された。

第 1 回会議において、昨年度総括および中期計画・年度計画を受けて作成した本年度活動方針を承認し、今年度の活動を本格的に始動した。本年度は、以下の 7 つを重点事項とした。

- ①教育組織改組および総合的教養教育の議論に関連する教育・組織改革への対応。とくに全学的な教育組織の改組、全学的な総合的教養教育の議論に対応し、「共通教育の担当責任体制」のあり方について、平成 27 年度の担当体制、および各部署のポイント配分最終決定を踏まえた平成 28 年度以降の担当体制について検討を行う(共通教育実施機構会議)
- ②「地(知)の拠点整備事業」に関連する教育改革への対応。とくに全学的 COC 事業の展開に対応して、地域関連授業科目の拡充と、地域関連教育カリキュラムの整備を行う(共通教育実施機構会議)
- ③平成 27 年度のカリキュラム編成を円滑に行う(カリキュラム等編成部会)
- ④課題探求実践セミナーの教育効果の検証を行う(カリキュラム等開発部会)
- ⑤「協働実践力・表現力・コミュニケーション力・国際性の育成」に重点を置いた授業科目の学生能力育成効果の検証に取り組む(カリキュラム等開発部会、自己点検・自己評価部会)
- ⑥第Ⅱ期教育力向上 3 力年計画で実施した授業改善アクションプランに関する総括と改善案の検討および試行(自己点検・自己評価部会)
- ⑦授業改善アクションプランの改善案に連動した FD について検討する(FD 部会)

各部会の努力および各分科会の協力により、上記の重点事項の多くに関して一定の成果を上げることができた。しかし課題を次期に積み残した事項もあり、それらに関しては来年度に向けて取り組みを進めていく必要がある。

①の共通教育担当体制に関しては、各学部学務委員長をメンバーとする WG を立ち上げ、6 回の会議が開催された。WG では、長期的方針と当面の平成 27 年度の担当体制について議論を行った。今後、各部署のポイント配分最終決定を踏まえた平成 28 年度以降の担当体制について具体的議論を進めることになっている。

②の COC 事業に関しては、関連分科会および多数の教員の協力を得て、次年度に向けて

非常に多くの地域関連授業科目を開設することができた。また共通教育実施機構会議の提案をもとに、各学部で地域教育関連カリキュラムの整備が進んだ。

③の担当体制は、ほぼ順調に作成作業が進んだ。

④の課題探求実践セミナーでは、学生の自己評価方式による教育効果の検証が行われた。客観的指標による教育効果の検証については、次年度4月に1年生に加えて3年生にもジェネリックスキルテストを実施することとし、その準備を進めている。

⑤の4つの力の育成については、総合教育センター大学教育創造部門と協力し、1年次の課題探求実践セミナーで学生の自己能力評価方式による教育効果の検証を行った。また、客観的指標による教育効果の検証については、次年度4月に上記③で記したジェネリックスキルテストにより実施することとし、準備を進めている。

⑥の授業改善アクションプランは、1学期・2学期の授業で実施した。2学期には、5月に実施した外部評価の結果を踏まえ、アンケート質問の選択肢の改善、アンケート実施方式の改善を行った。

⑦の授業改善アクションプランに連動したFDは、今年度、部会で検討は行われたが、実施には至らなかった。次年度の課題としたい。

(2) 常任委員会

常任委員会は、計9回(5/22、7/22、9/1、10/2、10/28、12/3、1/27、2/9、3/18)開催された。共通教育実施機構会議の議題整理及び事前検討を中心に議論がなされ、また予算や専決事項の審議を行った。

2. 部会の取り組みについて

今年度も、「カリキュラム等編成部会」、「カリキュラム等開発部会」「自己点検評価部会」、「FD部会」、「広報部会」の5つの部会を編成し、それぞれの領域における機構会議全体の取りまとめや分科会活動への支援を行った。以下、各部会の取り組みの要点をまとめておく。なお各部会の総括の具体的な内容は、各部会の総括を参照されたい。

(1) カリキュラム等編成部会

編成部会委員および各分科会の方々の努力によって、平成27年度のカリキュラム編成作業を無事に終えることができた。

(2) カリキュラム等開発部会

カリキュラム等開発部会は、環境省「環境人材育成のための大学教育プログラム開発事業」『環境人材育成のための社会協働教育プログラムの開発』(平成20年度採択)に基づく教育プログラムを引き続き実施した。

また、課題探求実践セミナー分科会と協力して、課題探求力や協働実践力に関する能力の検証を目的に1年生を対象にジェネリックスキルテストを実施した。

(3) 自己点検・自己評価部会

自己点検・自己評価部会は、1 学期および 2 学期に授業改善アクションプランを実施した。また第Ⅱ期教育力向上 3 力年計画(平成 23～25 年度)で実施した授業改善アクションプランについて、外部評価を受け、その結果に基づきアンケートの質問選択肢や実施方法を改善した。また、総合教育センター大学教育創造部門の援助を得て、スチューデントフィードバックによる授業改善支援も行った。

(4) FD 部会

FD 部会は、部会とキャリア形成支援科目分科会が協力して全学 FD を実施するとともに、SPOD フォーラム(四国地区大学教職員能力開発ネットワークフォーラム)への参加呼びかけ、および総合教育センターが開催する初年次科目担当者向け FD 企画等への参加呼びかけを行った。また、各分科会が独自に行う FD 活動に対して、それぞれ適時必要な支援が行われた。

(5) 広報部会

広報部会は、電子化された広報誌「パイプライン」を 2 回発行した。第 43 号では、共通専門科目の特集、第 44 号では、キャリア形成支援科目分科会とスポーツ・健康分科会の特集を組んだ。また次年度発行予定の第 45 号の編集業務を行った。

3. 分科会の取り組みについて

(1) 自律的な分科会活動について

分科会活動は、「カリキュラム編成」「自己点検評価」「FD」という3つの任務を柱として自律的に取り組んでいくことになっている。これは、共通教育の各分野・領域に対して持続的・総合的に責任を負う組織として分科会を位置づけ、カリキュラム編成だけでなく自己点検評価と FD という任務を重視しそれに対する自覚と取組を高めていくこと、また分科会活動における計画の策定や実施・総括等に関わること自体を教員の OJT 型の FD とすることなどを意図するものである。

各分科会は独自に年度活動計画を策定し、それに基づく取り組みを行っている。各分科会では、カリキュラム編成に加えて、分科会の目的意識に従って、授業アンケート・授業参観・FD 企画などの独自の取り組みが行われている(下記(3)(4)参照)。取り組み状況は分科会によって異なり、積極的に実施している分科会も見られるが、全体として独自活動が活発に展開されているとは言い難い状況があることも事実である。

このような状況をもたらしている要因として、委員の選出時期が遅く、分科会の立ち上がり時期が遅くなっていること、自己点検評価や FD がより多様化しており、分科会独自での対応が難しくなってきたことなどの点があげられる。

このような分析を踏まえて、選出時期を早めてもらうよう各学部に改めて要請することで改

善を図り、また「カリキュラム等編成部会」「自己点検評価部会」「FD 部会」と分科会との連携（相互支援）や部会長のリーダーシップの発揮等の対応を模索してきた。

なお各分科会の取り組みの具体的内容については、各分科会の報告を参照されたい。

(2) カリキュラム編成の取り組み

平成 27 年度の担当体制（基本担当コマ数）については、共通教育実施 WG で各学部担当数を決定した後、10 月～1 月頃にカリキュラム編成作業および授業担当者の決定を行った。カリキュラム編成は、各分科会内の議論・調整により、全体として順調に進められた。

(3) 自己点検評価の取り組み

自己点検・自己評価部会全体として、授業改善アクションプランを実施した。各分科会でこの取り組みに協力して取り組んでいるところもある。それ以外に、分科会独自の取り組みとして、次のようなものが実施されている。

大学基礎論分科会…各学部で実施

人文学部…各学科で自己点検を実施

担当者各自が報告書を作成し担当者間で共有など

理学部…第 1 週と第 15 週に授業評価アンケート

教育学部…学生への授業内容アンケート

農学部…授業参観、2 回の授業評価アンケート

医学部…授業評価アンケート

課題探求実践セミナー分科会…授業評価アンケートを実施

セルフ・アセスメント・シートを実施

ジェネリックスキルテストを実施

学問基礎論分科会…各学部で授業評価アンケートを実施

人文分野分科会…教員独自の意見聴取形式の自己点検評価活動の実施

授業改善アクションプランの実施

社会分野分科会…授業改善アクションプランを実施

生命・医療分科会…朝倉「健康」科目・岡豊「医学概論Ⅱ」で授業評価アンケートを実施

自然分野分科会…各学部の基本担当コマ数と実施状況の確認

地域志向授業の増加に向けて開講科目の内容を確認

外国語分科会…授業改善アクションプランの実施

スポーツ・健康分科会…スポーツ科学実技 6 科目で授業評価アンケートを実施

日本語・日本事情分科会…授業改善アクションプランを実施

(4) FD 活動の取り組み

FD 部会全体として、SPOD フォーラムへの参加呼びかけや共通教育全体の FD 研修を行った。それ以外に、分科会独自の取り組みとして、次のようなものが実施されている。

大学基礎論分科会…各学部で実施

人文学部…各学科で実施、FD ミーティング等

農学部…授業改善に関するアンケート結果について教員の意識共有
医学部…チューター研修会、授業計画甲斐是案の検討
課題探求実践セミナー分科会…SPOD フォーラム・全学 FD フォーラムへの参加
学問基礎論分科会…各学部で授業参観や意見交流会を実施
学門基礎論の各学部の状況に関するアンケートを実施し、回答内容を次年度シラバス作成の参考にするために各学部署員に提供した
人文分野分科会…オーディオ機器を用いた自律的授業改善の試みをテーマに FD を実施
授業を録音しそれを基に授業改善の工夫を行う活動を実施
社会分野分科会…SPOD フォーラムへの参加
生命・医療分科会…自己点検活動に基づく各教員の自主的研修の働きかけ
岡豊「スポーツ科学講義」で授業改善アクションプランを実施
自然分野分科会…共通教育 FD への参加
外国語分科会…「課題解決型の言語活動の必要性」をテーマにした FD を実施
スポーツ・健康分科会…「フィットネス」履修者に対するフォローアップ教室を開催
「スポーツ科学実技」履修者に対するアンケートを実施
日本語・日本事情分科会…SPOD フォーラムへの参加、独自授業アンケートを実施

4. 共通教育学生委員会について

学生委員会に関しては、設立後数年が経ち、その意義や目的が曖昧になっている部分がある。今年度は「共通教育の改善に役立ち、学生のやりがいもある学生委員会活動について検討する」ことを方針として掲げたが、十分な検討はできなかった。来年度に向け、学生委員会の役割について再検討する必要がある。

5. その他

- (1) 『平成 26 年度共通教育実施機構活動報告書』は 4 月中に発刊し、WEB 上で公開する。
- (2) 委員の交代や担当業務の変更に伴う引き継ぎについて、4 月以降も新委員から問い合わせがあった際には協力をお願いしたい。

Ⅱ カリキュラム等編成部会

1 カリキュラム等編成部会のまとめ

カリキュラム等編成部会長 高橋 俊(人文学部)

1. カリキュラム等編成の経過

10月20日 第1回カリキュラム等編成部会

「平成26年度共通教育担当体制に係る基本方針について(案)」を確認した後、本年度のカリキュラム編成スケジュールを確認した。

1月16日 第2回カリキュラム等編成部会

「平成26年度共通教育科目授業題目(案)」が了承された。

2. 平成26年度カリキュラム編成の総括

本年度は、次年度の地域協働学部発足、そして平成28年度に予定されている全学的な改組に伴う共通教育科目の取り扱いについての議論が行われたため、本部会では基本的に前年を踏襲する方向でカリキュラム編成が行われ、そのため部会会議も例年より少なかった。しかし今後、大幅なカリキュラム変更(共通専門科目の廃止、各学部の担当コマ数の変更等)が予想されるため、次年度は本部会におけるより細かな議論が必要になると思われる。

2 大学基礎論分科会

大学基礎論分科会長 藤山 亮治(理学部)

1. 平成26年度カリキュラム編成

「大学基礎論」では大きく〈大学で学ぶとは〉〈社会はどのような力を求めているか〉〈地域社会における高知大学の役割と意義〉を大学初年次の早いうちに認識し、更にコミュニケーション能力、プレゼンテーションスキル等も習得してもらい演習主体の授業という大枠は決まっているものの、具体的内容は各学部・に任され、実施されている。26年度に実施された各学部の内容は以下のようである。

人文学部:

アドバイザーとアドヴァイジーの顔合わせの後、旧「日本語技法」に相当する、主として大学でのレポートや論文の書き方、あるいは発表の仕方などの授業を、11クラスに分かれて行った。各教員は、そのクラスの活動状況を学期末に報告した。なお、最終回に2学期の「学問基礎論」の内容を紹介し、どのクラスを受講するかアンケートを行った(人間文化学科)。

理学部:

「理学部で学ぶことの意義」(学部長)の講義の後、学外講師による講演3回、「4年間を有意義に過ごすために」(副学部長、学科長の4名)の講演を実施した。各講演の翌週には毎回、7クラスでの少人数グループワークを通して、学びの姿勢の転換、コミュニケーション能力の獲得、社会の中の大学の位置づけ等の認識を促すカリキュラムを編成した。またアドバイザー教員との面談を1回にした一方で、欠席数が多い学生については、アドバイザー教員による面談を行った。

教育学部:

昨年度に引き続き、本講義を実習系授業全体の基礎講座と位置づけ、教員養成の基礎となる内容の講義を実施した。本講義は課題探求実践セミナーの内容と連動して実施されており、これまで受け身的に学ぶことが主体だった学生に、教師になる上で身につけなければならないさまざまな問題について積極的に考える機会を与えたと考えられる。

農学部:

「大学で学ぶとは」、「地域社会における高知大学の役割と意義」、「国際社会における高知大学の役割と意義」(学内講師3名)の基調講演の後、3クラスに分かれて計3クールのグループワークとプレゼンを行った。担当者による初回FD(4月19日)において、学習意欲の乏しいグループおよび個人に対しての適切な指導方法に関して議論し、そういう場合は教員が適切に関与するなどの意見が出た。また、本講義は主にインターネットから得た情報を集約し発表することを否定しないが、そこに自らの考察を加える指導を徹底する必要があるとの意見が出た。これらの意見を反映することにより、最終プレゼンでは上記の問題が解消されるとともに、昨年度と比較してグループごとの発表レベルのばらつきが少なくなり、全体的に顕著なプレゼン技術の向上が見られた。

医学部:

専門職教育の色合いが濃い医学部では、よき医療人を養成する目的に沿ったテーマに改編するとともに、医学科・看護学科が併設されているメリットを活かし、合同授業として実施している。テーマは「患者さんの視点から見た医療」、「望ましい医療サービス」、「プロフェッショナリズム」である。授業形態は、各テーマについて「講義 → グループ討論 → 発表」を3クール繰り返した。グループ討論ではクラスを20グループに分けてチューターが指導に当たった。グループ発表は5グループずつ4教室に分かれて実施し、それぞれ1人の教員が担当して授業の運営と評価を行った。最終日には本学を卒業した若手医療従事者2名と学生との対話を行った後、期末試験として最終

レポートをまとめさせた。

土佐さがけ:

国際人材育成コース、グリーンサイエンス人材育成コース、生命・環境人材育成コースの3コースに属する学生17名を受講生として、前半は講義形式による話題提供を中心とし、後半は課題探求とその成果をまとめるグループワークを中心として、過去2年間の実施状況と反省点を踏まえたカリキュラム編成で実施した。授業目標は、(A)他者から教わるだけでなく、自身が学びとる姿勢への転換を図ること、(B)土佐さがけプログラムの特色と意義、社会が求める力と社会における高知大学の役割と意義を理解すること、(C)グループワークを通じて相手の話をよく聞き理解して、自分の考えを分かりやすく伝える双方向のコミュニケーション力とプレゼンテーション力を向上させる、の3点である。これまでも理事・副学長の講義形式による話題提供を活用してきたが、今年度は、①教務担当理事による「国際化」と「グローバル」とは何かを考えること、②さがけプログラム運営委員長による「大学で学ぶ」意義を考えること、③コース長による3つのコースの内容紹介と学びへの期待や目標を考えること、④国際連携担当副学長による「世界に貢献する」高知大学の役割と現状を知ること、⑤地域連携担当副学長による「地域社会に貢献する」高知大学の実情を理解すること、⑥研究担当理事による「大学で研究する」姿勢と、⑦総務担当理事による「海外における研究とその意義」を実体験から学ぶ機会を得ることができた。大学運営の最前線に立つ大学教員のほぼ全員から、「大学における学びの姿勢」を受講生が理解し考える機会となり、授業目標(A)・(B)を達成する上で、大学基礎論として非常に贅沢で充実した内容であったと言える。また、授業目標(C)のコミュニケーション力とプレゼンテーション力を高める実践として、現在の簡単な自己紹介から、生い立ちや出身地を含めた自己形成の背景をスライド一枚で紹介する時間を作ると共に、後半のグループワークにおいて、グループ毎に課題探求の対象を選択し、各々が探求し考察した成果をプレゼンテーションすると共に、全員による質疑応答と相互評価を行った。

2. 自己点検評価活動について

人文学部:

3学科間で内容が異なるが、3学科ともに担当者間での自己点検評価活動が行われている。人間文化学科では、担当者が(1)授業の概要(2)学生の取り組み具合(3)授業の成果(4)問題点や今後の反省点(5)その他、の項目で報告者を作成し、担当者間で情報共有がなされている。

理学部:

昨年と同様に、学生との動向を把握するために、アドバイザー教員との面談を講義2回目に実施し、昨年同様に出席状況をKULASに入力し、出席状況を共有することにより欠席者への指導を丹念に行った。第1週目および第15週目に授業評価アンケートを行った。

教育学部:

学生へのアンケートによる授業内容の意見聴取を実施した。

農学部:

担当するクラス間での授業参観や2回にわたり授業評価アンケートを実施した(5月23日、6月27日)。

医学部:

プロフェッショナリズムについて考えさせるテーマで使用するトリガービデオの内容が、「医学科6年のある学生がドクターコールに応えられるか思い悩む」というものであり、医学科の学生と看護学科の学生で温度差が生じやすいことが指摘されていた。今年度は、終末期医療で問題になっている「胃瘻」を中止すべきかどうか考えさせるテーマに変更し、看護学科の学生も同じ医療人として社会的・倫理的な問題に取り組ませることができた。

大学基礎論自己分析アンケートの集計結果ならびに授業評価アンケートの結果から、本授業は

学生からの評価が他の学部比べて高いため、現在のやり方を踏襲して良いと考えられる。

土佐さきがけ:

授業の進行並びにカリキュラム全体の進行と調整は、前西先生を中心として各コース教員が協力して行うことができた。特に、前西先生による課題と指示の伝達、つまり、自己紹介など個人毎に与える課題内容や整理に関する指示、グループワークにおいて探求すべき課題や目標の設定に関する指示、地域情報の提供とインタビュー対象となる人物と事象に関する指示など、初めてグループワークを体験する受講生をうまく誘導するシステムが構築できたと思われる。今後はさらに、各コースが持つ多彩な専門家と多彩な専門分野を、課題に探求の対象として活かすこともできると思われる。

3. FD活動等について

人文学部:

3学科間で内容が異なるが、3学科ともに担当者間でのFD活動が行われている。国際社会コミュニケーション学科では、FDミーティング(基礎論の総括、課題探求の必修化、卒論)の中で、大学基礎論に関する課題の検討がなされている。社会経済学科では、2014年度に検討した事項(・授業方法を統一するか、否か・レジュメの書き方を統一するか、否か・報告方法を統一するか、否か・3冊を通して、なんらかの共通認識や目的を設定するか・期末レポートの内容を統一するか、否か)と2015年度の検討事項(・今年度もこれまでと同じ方式でよいか・本を何冊読ませるか・本を選択できるようにするか、統一するか・授業方法を統一するか、否か・レジュメの書き方、提出方法を統一するか、否か・報告方法を統一するか、否か・期末レポートの内容を統一するか、否か・剽窃防止の周知をどのようにするか)が話し合われている。

理学部:

クラスにより成績評価のバラツキが見られ、成績評価についての検討と担当者間の情報交換が必要である。

教育学部:

今年度の実施内容は昨年度のものを踏襲しており、教員になることを目指している学生に、その基礎知識を学ばせるという目的は十分に達成できたと考えられる。

農学部:

4月19日:講義内容を充実させるため、講義改善策の提案、改善意識の向上を図った。また、クラス運営におけるオリター活動内容の検討を行った。

5月23日:アンケートによる授業改善の意見聴取、教員の意識の共有を行った。

6月27日:同上

7月25日:振り返りレポートの実施、反省会。

医学部:

4月14日(月)と17日(木)の18:00~19:00まで大学基礎論チューター研修会を開催し、担当チューターのファシリテーション力向上を促した。また、授業評価アンケートの自由記載欄に目を通し、授業計画の改善策を検討した。コメンテーターに対するFDは実施できなかった。

土佐さきがけ:

学際領域のプログラムの利点は、受講生が興味を持つ内容や対象も多彩であると共に、土佐さきがけプログラムの学年進行に従って、プログラム運営に関わる教員の教育意識を高まることから、全コースに属する多彩な専門家と多彩な専門分野に触れる機会を増やすことによって、受

講生が幅広く探究するための視野を広げるカリキュラムへと発展させることに努めたい。

4. その他

人文学部:

社会経済学科では、学生指導において問題が生じたときの対応について話し合われた。

教育学部:

来年度より生涯教育課程の新入生はおらず、学校教育教員養成課程の入学生が30名増えることになっているため、授業の実施体制に無理がないか、十分に検討する必要がある。

3 課題探求実践セミナー分科会

課題探求実践セミナー分科会長

俣野 秀典(総合教育センター)

1. 平成 27 年度カリキュラム編成の経過

学部開講課題探求実践セミナーについては各学部に依頼し、それ以外のセミナーについては各担当者に授業実施を依頼した。

平成 27 年度開講授業題目

人文学部開講	9 題目
教育学部開講	1 題目
理学部開講	3 題目
医学部開講	2 題目
農学部開講	1 題目
地域協働学部開講	1 題目
地域協働入門	3 題目
自由探求学習	2 題目
学びを創る	1 題目
学びを考える	1 題目
国際協力入門	1 題目

(※定員は授業ごとで異なる)

2. 平成 28 年度への課題

担当教員が実施しやすく、かつ学生にとっても履修しやすいようなカリキュラム編成となるよう努力したい。

4 学問基礎論分科会

学問基礎論分科会長

福田 達哉(農学部)

学問基礎論の教育目標

各学部の専門分野において必要な知識や素養を学ぶとともに、日本語を含めたプレゼンテーション技法を身につける

平成 26 年度の活動総括

各学部の考え方にに基づき、授業参観や学生による授業評価アンケートを実施した。その結果を、次年度の授業改善やカリキュラム編成に有効に利用した。

活動報告

カリキュラム編成

4月-1月：各学部においてFD活動を踏まえたカリキュラム編成。

2月：各学部の授業計画や担当者を確認。

自己点検評価活動

4月-12月：学生による授業アンケート等を各学部で実施。

1月-2月：アンケートの集計や結果の整理。

FD活動

4月-1月：授業参観や意見交換会等を各学部で実施し、授業改善に役立てる。

12月-2月：12月に学問基礎論に関するアンケート調査を実施した。次年度のシラバス作成の参考に供するため、2月までに回答のあった内容を各委員に提供した。アンケート内容と回答内容は「IV FD部会」で報告しているとおりである。

5 人文分野分科会

人文分野分科会長 大櫛 敦弘(人文学部)

1. 平成 26 年度の次年度カリキュラム編成の経過

- (1)平成 26 年 7 月の第2回共通教育実施機構会議で平成 27 年度の共通教育に係る担当体制(案)が提示されたのをうけて、9 月に分科会を開催しカリキュラム編成にとりかかることになった。
- (2)12 月に平成 26 年度人文分野開講授業題目表をとりまとめて作成し、平成 27 年 1 月の第 2 回カリキュラム等編成部会、2 月の第 6 回共通教育実施機構会議においてそれぞれ承認された。

2. 平成 28 年度カリキュラム編成に向けた課題

(1)物部キャンパス開講にかかる平成 28 年度カリキュラムの編成作業

この問題については平成 23 年度から 24 年度にかけてカリ部会長の下に設置されたWGにおいて検討作業が行われており、その後も開講数の問題を中心にカリ部会、農学部との間で協議が続けられてきた。これらの経緯については昨年度の報告にも詳しく述べたところである。28 年度カリキュラム編成においてもその扱いが問題になるものと思われるが、この間、協議を通じて問題の所在や双方の立場についての理解が深まり、また遠隔授業システムや連絡バスの運行、あるいは非常勤講師による開講などの可能性についても議論されている。こうした土台の上に、来るべきカリキュラムの大規模な改革に向けて、農学部学生も含めた全学部生にとってのよりよい共通教育実施体制を構築し、関係各部署も納得できるような具体的な方途が求められている。

(2)地域関連科目授業について

全学的に地域関連科目拡充の取り組みがなされている中、第3回共通教育実施機構会議では人文分野について、平成 27 年度カリキュラム編成では現行の2科目からさらに2科目の増加が要請されたが、結果としてそれをはるかに上回る開講数を得ることができた。各分野の取りまとめに当たっていただいた分科会の先生方のご尽力に感謝したい。ただし、第 2 回カリキュラム等編成部会でも発言したように、人文分野の授業は毎年内容の変わるものが多いため、単純に前年度の数から積み上げてゆく性格のものでは必ずしもなく、このへんの事情を広く周知して理解をえると同時に、一定の開講数を今後どのようにして確保してゆくべきかについて考える必要があるであろう。

(3)分科会の委員構成について

人文分野の授業担当者で新設の地域協働学部に移る先生もおられるので、ここからも委員を出していただきたい。

6 社会分野分科会

社会分野分科会長 緒方 賢一(人文学部)

1. カリキュラム編成の経過

社会分野分科会では、平成 27 年度から地域協働学部が開設されることに伴い、基本開講数(ノルマ)の一部を地域協働学部に振り分ける作業を行った後、カリキュラム編成部会の編成方針に基づき、27 年度のカリキュラム編成を行った。

<平成 26 年 10 月～平成 26 年 12 月 カリキュラム編成作業>

基本開講数 44(43)コマについて、人文 29、地域協働 7(うち 1 は CBI 関連科目でキャリア形成支援科目のノルマとしてカウント)、教育 5、総合教育センター1、非常勤 2 と決定した。社会分野を担当してもらっている人文学部(国際社会コミュニケーション学科、社会経済学科)、教育学部、総合教育センター、および地域協働学部に次年度担当体制について依頼をし、担当者・時間割を調整し決定した。

<平成 27 年 2 月 カリキュラム編成作業終了>

社会分野が担うべき基本開講数 43 コマ(人文 29、地域協働 6、教育 5、総合教育センター1、非常勤 2)の他に、多様な科目を関係する学部等の協力を得て開講するカリキュラムを編成できた。教養科目では基本開講の 37 題目(旧主題別 22 題目、旧分野別 15 題目)に加えて、18 題目を開講することができた。共通専門科目基礎科目では基本開講題目数(6 題目)に加えて 12 題目を人文学部、地域協働学部の協力を得て学部開講科目として編成することができた。

例年 1 月にカリキュラム編成作業は完了するが、今年度は地域協働学部開設、教員採用人事の遅れおよび地域科目の必修化に伴い、通常編成作業が終了してから新たに分科会で審議等を行い、共通専門基礎科目 1 題目、教養科目 5 題目を新たに開講することが決定した。

2. 平成 27 年度カリキュラム編成のポイント

- (1) 物部キャンパス開講科目については、人文学部 2、地域協働学部 1 とし、地域協働学部開講分について 27 年度は集中講義で開講することとした。
- (2) 地域協働学部開設に伴い、共通専門基礎科目を大幅に新規開講した(地域協働学部分は 8 題目)。
- (3) 「土佐の海の環境学 I」は主担当教員が人文学部であること等から、27 年度以降常に人文学部ノルマとして社会分野でカウントすることになった。

3. 課題

- (1) 地域協働学部開設、人文学部改組等に伴い、共通専門基礎科目の開講数が基本開講(ノルマ)内 6、基本開講外 12 と、逆転現象が生じた。共通専門基礎科目については 28 年度から

廃止される予定であるので、予定通りに廃止されれば問題とはならないが、次年度のカリキュラム編成に際しては確認すべき点である。

- (2) 28 年度の共通専門基礎科目廃止に伴い、基本開講(ノルマ)がどうなるのか、推移を見守り、他分野との均衡を図っていくことが必要になる。
- (3) 教養科目の基本開講(ノルマ)外開講科目が 18 題目あり、基本開講科目数の半数近くに達している。一部ノルマに編入するなどの抜本的対応策を考える時期に来ている。
- (4) 全学的改組が進行する中、学部、センター等に配置される教員が大きく変動することが予想される。教養社会分野を担当できる教員がどこにどれだけ居るのか、改組の進捗状況に合わせて確認し、ノルマの変更等について、検討すべきである。
- (5) 物部キャンパス開講科目について、27 年度は 3 題目開講することになったが、例年 3 題目合計で 70-80 人程度しか受講者がおらず、朝倉キャンパス開講科目の受講者と比べて 1 科目あたりの受講者が少ない状況が続いている。朝倉キャンパス開講科目を充実させることにもなるので、物部開講科目数について削減を検討すべきである。また、その際、(4)の項目でも述べたが、物部キャンパス(農学部)にも社会分野を担当できる社会科学系を専攻する教員が複数配置されていること等の情報についてもあわせて検討すべきである。
- (6) スポーツ科学講義について、共通教育実施機構会議で 28 年度以降社会分野から除外する方針が決定した。

7 生命・医療分科会

生命・医療分科会会長
野田 智洋(医学部)

1. 平成 26 年度カリキュラム編成の経過

各学部担当教員とメールによる連絡調整を行い、カリキュラム編成の基本方針を確認した上で、下記の通り編成作業を行った。

- ・ 1 月 22 日(水):学部、センター代表者あてに責任者の選任と、開設学期ならびに曜日時限の決定通知を行い、平成 26 年度授業計画策定の依頼を行った。
- ・ 2 月 3 日(月):すべての部局から授業計画が提出された。教育学部の担当が矢野先生から幸篤武先生に変更となった。
- ・ 2 月 17 日(月):代表者に授業計画一覧表を送り、シラバス登録を依頼した。
- ・ 4 月 17 日(木)授業を開始した。

開講曜日及び時間の決定に当たっては、時間割の移動を極力おさえ、混乱のないよう配慮した。従って、これまでの木曜日開講をベースとした時間割とした。さらにオムニバス形式にするか部局等が独自で開講するかについて検討したが、偏ることなく広い視野にたつて授業を提供するという観点から、部局等のオムニバス形式とすることとした。

2. 平成 26 年度カリキュラムの変更・改善点

「健康」AとBについて、平成 26 年度は教育学部の矢野先生に代わって幸先生が担当することになった。平成 26 年度も理学部の島内先生による「アルコール学概論」が引き続き開講されたため、この分野の選択肢が増えている。担当者に感謝したい。

3. 平成 27 年度への課題

「健康」の各クラス間の受講者数に偏りが生じている。受講者数が多いクラスほど、学生満足度が低い傾向が伺える。受講人数の制限について、共通教育全体で考える必要があるだろう。授業内容については、担当部局の学問特性を生かしつつ、内容が偏ることなく編成したい。

8 自然分野分科会

自然分野分科会長 岡本 達哉(理学部)

1. 自然分野分科会運営体制

自然分野分科会では、「自然科学に関する基礎的な知識と考え方の習得」という目標を実現するため、昨年度と同様に「カリキュラム等編成に関する課題を点検し、カリキュラム編成や実施環境を改善する方針」のもとに分科会活動を行った。

自然分野分科会は、理学部、教育学部、農学部および医学部から選出される13名の委員で構成されるため、日程調整等を考慮すると全員が一同に会しての会議は実施が困難である。このため、分科会はメール会議とし、カリキュラム等編成に関する作業や審議依頼に対応した。

副分科会長の選任は従来からのローテーション(教→理→農→医→教・・)に従い、医学部選出の高田委員がFD担当となった。自己点検担当については農学部委員の中から1名を選出するよう、複数回にわたって分科会長から依頼を行った。しかし何ら対応が取られず、結果として副分科会長(自己点検担当)を選任することはできなかった。

【自然分野分科会委員】

分科会長: 岡本 達哉(理学部, 生命)

委員

- ◆理学部: 小野寺 栄治(数理), 北川 健太郎(物質), 金野 大助(物質), 中川 昌治(地球), 高田 直樹(情報)
- ◆教育学部: 加納 理成, 原田 哲夫
- ◆農学部: 濱田 和俊, 中村 洋平, 上野 大勢, 原 忠
- ◆医学部: 高田 淳(副分科会長, FD担当)

2. 平成26年度カリキュラム関連事項

「四国5大学連携による知のプラットフォーム形成事業」におけるeラーニング開講科目(第2学期開講)についてメール会議を開催し、自然分野科目としての開講を承認した(7月)。

- ・サイエンスリテラシーの化学(高知大学)
- ・気象災害を防ぐ(徳島大学)
- ・地震・火山災害を防ぐ(徳島大学)
- ・情報のいろは(香川大学)

理学部情報科学コースからの要請を受け、「数理の世界」(第2学期 集中)に関してメール会議を行い、開講を承認した(2月)。

3. 平成27年度カリキュラム関連

カリキュラム編成作業

第2回共通教育実施機構会議(7月29日開催)において、共通教育の教育担当体制(基本担当コマ数)が了承された。10月20日に開催されたカリキュラム等編成部会における部会長からの依頼に基づき、平成27年度カリキュラム編成作業を開始した。各学部・分野担当科目について分科会委員が分担し、担当者・科目名・開講学期・時間等の変更・修正作業を進めた。編成にあたっては、共通教育主管から要請があった地域志向科目の新設、転換が可能かどうかを重点項目として検討を行った。

一部科目の担当者については、編成作業の時点で高知大学に着任していないなどの理由で未定の箇所があったものの、担当者・開講学期・曜日・時限等の確定はほぼ順調に進められた。主要な変更点は以下の通りである。

【科目新設】

「法化学概論」(地域志向科目)

【題目変更】

「花粉を科学する」,「生物科学」→「生物の多様性と生存戦略」,「動物の進化」

【担当体制変更】

「物理学概論Ⅰ」(物部キャンパス開講)

今年度までは理学部(理学科物理科学コース)の専任教員が担当していたが、来年度は非常勤講師による講義となった。

4. 第62回中国・四国地区大学教育研究会参加報告

日程:2014年6月14-15日 開催場所:島根大学

参加者:自然分野分科会からは、分科会長が共通教育主管、他分科会等からの参加者とともに出席した(6月15日開催の自然科学分科会のみ)。

自然科学分科会では、『社会的基礎力としての自然科学とその能力育成』(司会:尾崎 浩一(島根大学 生物資源科学部 教授))をテーマとし、以下の発表が行われた。

○「暗記科目ではない生物学:生命現象を社会問題と関連づけて考えさせたい」

松崎 貴(島根大学 生物資源科学部 教授)

○「日常に潜む数理科学」

内藤 貫太(島根大学 総合理工学研究科 教授)

○「学びのコミュニティを活用した徳島大学における教養教育」

斉藤 隆仁(徳島大学 全学共通教育センター, 総合科学部 准教授)

これらの発表では、各大学における事例が紹介され、講演後は出席者の間で活発な議論が行われた。

5. 総括

今年度は共通教育に関して大きな変更がなかったため、分科会の活動は次年度のカリキュラム確定作業を中心とする例年とほぼ同様の作業であった。来年度以降は、地域志向科目の増加、現在検討が行われている理学部、農学部の改組に伴う共通専門科目から学部専門科目への移行などに関連し、共通教育の担当体制に関するさらなる議論が必要になるものと予想される。

昨年度の報告書でも検討事項として挙げられた「医学部教養教育との統合」および「共通教育と専門教育の連携」に関しては、今年度も具体的な議論は行われなかった。

自然分野分科会委員は、朝倉、物部、岡豊の3キャンパスに分散している。今年度の活動を振り返ると理学部委員の負担が大きく、今後の改善が望まれる。

9 外国語分科会

外国語分科会長 斎藤昌人(人文学部)

1. カリキュラム編成の経過

共通教育に係る担当体制案を受け、10月から各外国語(英・独・仏・中)にカリキュラムの策定を依頼、12月に各言語の確定案をとりまとめる。なお、韓国語とスペイン語については、例年通りとのことなので、共通教育係にとりまとめを依頼する。

開講コマ数は例年通り外国語全体で155コマとなっている。各言語の内訳は以下の通りである。

英語(英会話を含む):96コマ

独語:21コマ

仏語:6コマ

中国語:27コマ

韓国語:3コマ

スペイン語:2コマ

なお、2014年度末での仏語担当教員(人文学部)の退職に伴う措置として、2015年度は仏語の非常勤が2コマ増となる。これに関する非常勤手当は、人文学部が措置することとなっている。

2. 自己点検自己評価

本年度は5週目アンケートを実施し、各教員の責任のもとに授業改善を行った。

3. FD

今年度は、外部講師を招き以下のFDを実施した。

①「課題(タスク)解決型の言語活動の必要性 - Language Learner を Autonomous Language User にするために -」(2014年12月3日)

(講師:東京外国語大学 高島英幸氏)

②「編集者が教える TOEIC テスト、TOEIC SW テスト指導法」(2015年2月10日)

(講師:研究社編集部 金子 靖氏)

①、②とも英語の指導法・教育力向上を主たる目的としたものであるが、①は英語の授業のみならず、外国語授業全般にとっても有意義なものであった。

4. 課題

2016年度に予定されている共通教育の枠組みの大幅な変更にあわせ、担当体制の見直しと整備を検討する必要がある。

11 スポーツ・健康分科会

スポーツ・健康分科会長 本間聖康(教育学部)

1.カリキュラム編成の経過

10月20日 「平成 27 年度共通教育カリキュラム編成依頼について」を承認

10月22日 「平成 27 年度共通教育科目カリキュラム(授業題目表)の提出について
(依頼)」を受信

11月10日 平成 27年度スポーツ・健康分野時間割について原案に基づき検討した。

12月 1日 平成 27年度スポーツ・健康分野時間割修正案について検討した。

12月12日 平成 27 年度共通教育科目カリキュラム(授業題目表)の提出

1月16日 平成 27 年度共通教育科目カリキュラム(授業題目表)の承認

2.カリキュラム編成の確認・変更点及び改善点

(1)平成 26 年度を振り返って

スポーツ科学実技に関して、平成 26年度は 1 学期の水曜 2 時限の受講者が少なく、時間割変更が必要と思われた。

健康及びスポーツ科学講義において今年度も 200 名(健康A:221 名 D:280 名 スポーツ科学講義A:241 名)を超える受講者があった。以前は学部ごとの開講時間が指定されていたが、時間指定もなくなり他の開講授業との関係で受講者数の多少が生じているものと思われる。

(2)平成 27 年度に向けて

スポーツ科学実技に関して、平成 26年度は 1 学期の水曜 2 時限の受講者が少なく、その対応策として、平成 27 年度は時間割変更を検討した。1 学期水曜2時限開講科目のうちエアロビクスを中止し、ゴルフについては、もう1年様子を見ることとした。スキー・スノーボードは、実際の実技指導では、スキーの初心者班と経験者班・スノーボードの初心者班と経験者班に分かれて指導が必要であることから、担当教員数と必要開講コマ数との関係を考慮して、スキー・スノーボードを実施上は、スキーⅠ、スキーⅡ、スノーボードⅠ、スノーボードⅡとして4コマ開講とすることとした。

健康及びスポーツ科学講義においては、時間割の変更は困難と思われるため現状の時間割での開講とした。

3. 課題等

開講時間の指定制が崩れたこと、選択の授業が多くなったこと、さらに、特別授業期間も含め、専門の授業が同時期に開講されることなどで、受講者数が予測できなくなっているように思われる。

12 日本語・日本事情分科会

日本語・日本事情分科会長

林 翠芳(国際連携推進センター)

活動の概要

日本語・日本事情科目は、第1学期に「日本語Ⅰ」、「日本語Ⅱ」、「日本事情Ⅰ」、「日本事情Ⅲ」、「日本事情Ⅴ」、第2学期に「日本語Ⅲ」、「日本語Ⅳ」、「日本事情Ⅱ」、「日本事情Ⅳ」、「日本事情Ⅵ」が開講されている。

日本語・日本事情分科会では、2006年度～2008年度にわたって分科会独自の形式で授業評価アンケートを全科目の受講学生を対象に実施した。それにより、各授業の自己点検評価活動が行われるとともに、共通教育日本語・日本事情科目のあり方を考えていく基礎資料とすることができた。また、2009年度以降は、共通教育が実施する自己点検評価活動等の実施を通して、授業の改善に努めた。

1.カリキュラム編成

今年度も引き続き、人文学部教員は日本事情科目を、国際連携推進センター教員は日本語科目を担当した。科目構成は、前年度同様、日本語科目Ⅰ～Ⅳ、日本事情科目Ⅰ～Ⅵを実施した。

また、2015年度の開講基本コマ数、担当体制については、メール等で調整を行い、担当者及び開講曜日・時限を決定した。

2.自己点検活動

授業の改善を目的に、一分の授業では、5週目・15週目アンケートを実施した。

3.FD活動

教員同士の相互参観やピアレビュー等の活動は授業担当教員の授業時間帯が重なっていたため、実施困難な状況にあり、一分の授業では独自の授業アンケートを実施した。

科目によって、受講者数のばらつきがあるが、受講生の比率については、正規生と交換留学生のバランスは改善されつつある。

Ⅲ 自己点検・自己評価部会

1 自己点検・評価活動の全体的状況

自己点検・自己評価部会長 松井 透(理学部)

はじめに

「授業改善アクションプラン」は、共通教育担当教員が「学生の授業評価」や「相互授業参観」、
「ピア・レビュー」により得られた授業改善のための課題に基づき、「アクションプラン」を作成・学生
への提示・実行・検証を行うもので、平成 20 年度 2 学期から試行がはじまり、平成 24 年度 2 学期
から本格実施された。共通教育自己点検・自己評価部会は例年通り「授業改善アクションプラン」
の実施と分析およびその改善を中心に活動を行った。本稿では「授業改善アクションプラン」のう
ち、「5 週目・15 週目アンケート」の結果について報告する。

なお、本年度 5 月に実施した「授業改善アクションプラン」外部評価については平成 27 年 4 月発
行予定の報告書を参照されたい。

方法

本年度も昨年度同様に回答理由選択式(付録1)と回答理由記述式のアンケートを実施した。た
だし、2学期は外部評価結果をもとに回答理由選択式アンケートから否定的な項目を削除して実
施した(付録2)。集計されたアンケートデータは、まず1学期分と2学期分を統合し、全授業で実
施された「はい」～「いいえ」で回答する選択式アンケート項目と自由記述欄のデータを抽出した。
選択式アンケート項目については5週目と15週目との比較を行った。また、自由記述欄の分析に
はMeCab Ver.0.996(工藤 2013¹)と KH Coder Ver.2 beta 32c²(樋口 2004³、2014⁴)を用い、5週
目と15週目を比較した。

結果

本年度は1学期 16 件、2学期 26 件、合計 42 件のアンケートが実施されたが、これは昨年度実
施数(46 件)をやや下回る結果となっている(図 1)。なお、本年度は 2 つの授業で 15 週目のみア
ンケートが実施されたが、そのデータは分析の対象から除外した。

¹ 工藤拓. 2013. MeCab: Yet Another Part-of-Speech and Morphological Analyzer.

<http://mecab.googlecode.com/svn/trunk/mecab/doc/index.html>

² 樋口耕一. 2001-2015. KH Coder. <http://khc.sourceforge.net/>

³ 樋口耕一. 2004. テキスト型データの計量的分析 - 2つのアプローチの峻別と統合. 理論と方法 19: 101-115.

⁴ 樋口耕一. 2014. 社会調査のための計量テキスト分析. 内容分析の継承と発展を目指して. ナカニシヤ出版. 京都.

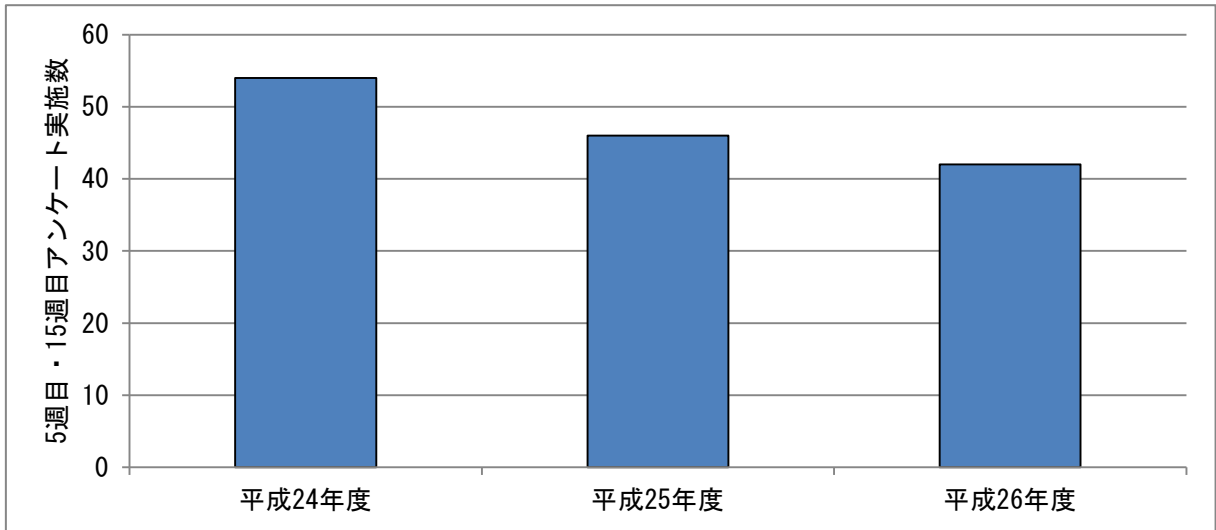


図 1. 5 週目・15 週目アンケート実施数.

平成 24 年度は「授業改善アクションプラン」本格実施初年度ということもあり 54 件の授業で 5 週目・15 週目アンケートが実施されたが、その後の実施数は減少を続けている。また、平成 25 年度と本年度でアンケートを実施して頂いた教員の顔ぶれがほぼ固定されていた。次年度は、教員へ実施依頼を行う際に、アンケートによる授業改善効果を示すデータを添付するなど、教員へのアピールをさらに強化する必要がある。なお、分野別の実施数を図 2 に示す。

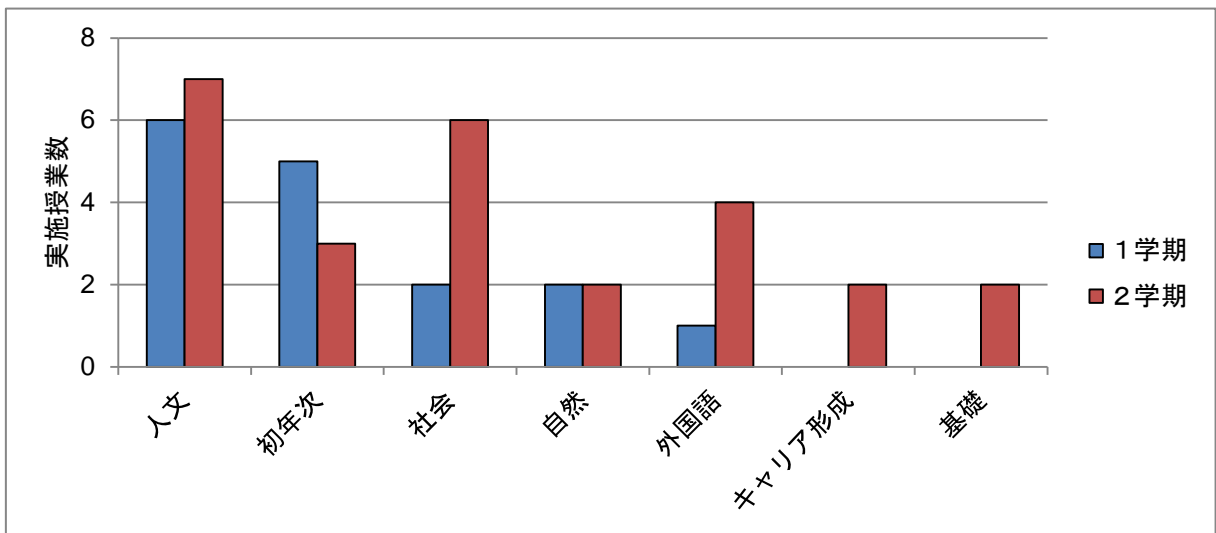


図 2. 5 週目・15 週目アンケートの分野別実施数.

次年度は各分科会において、「授業改善アクションプラン」実施のさらなる働きかけを行っていただきたい。

以下、アンケートの項目別にその結果を示す。

【全授業共通質問】

1. この授業で教員は、受講生の学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めていると思いますか？

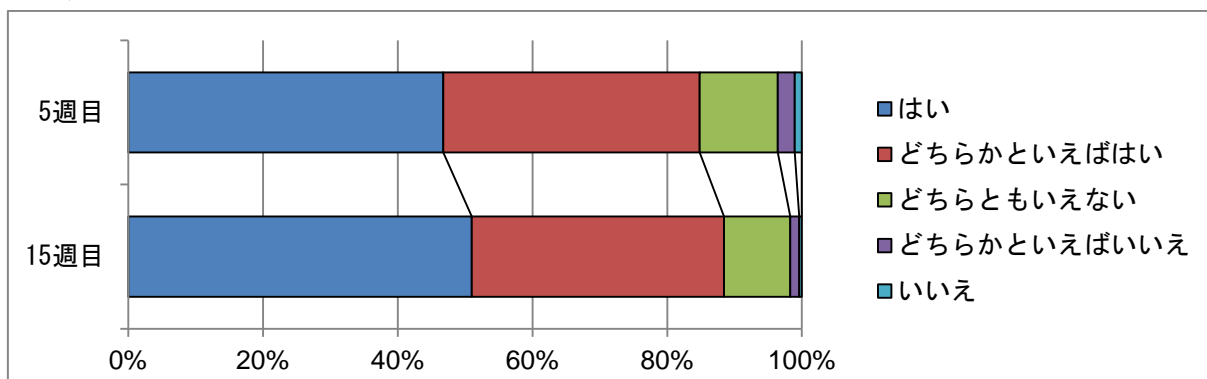


図 3. 学問的関心・知的好奇心を高めるよう授業を進めているか.

5週目の時点で80%を越える学生が肯定的評価を行っていたことから、本年度のアンケートが実施された授業の多くが当初から様々な工夫を行っていたものと思われる。15週目では「はい」の割合が増加し、「どちらともいえない」や否定的な意見が減少していることから、各教員が受講生の学問的関心・知的好奇心を高めるためさらなる工夫を行っていたことが分かる。

2. この授業で教員は、受講生の知識・能力や興味・関心を確認しながら授業を行っていると思いますか？

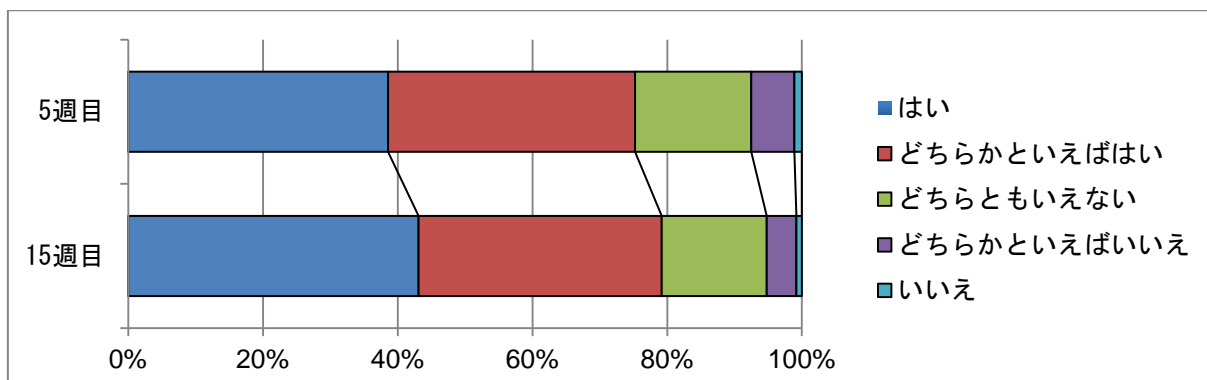


図 4. 知識・能力や興味・関心を確認しながら授業を行っているか.

15週目では「はい」の割合が増加し、「どちらともいえない」や否定的な意見が減少していることから、各教員がこれまで以上に受講生の知識・能力や興味・関心を確認しながら授業を行っていることが分かる。しかし、15週目においても「はい」と回答した学生は半数に届いていないため、さらなる改善が必要であろう。

3. この授業で教員は、受講生に分かりやすい授業をするように努めていると思いますか？

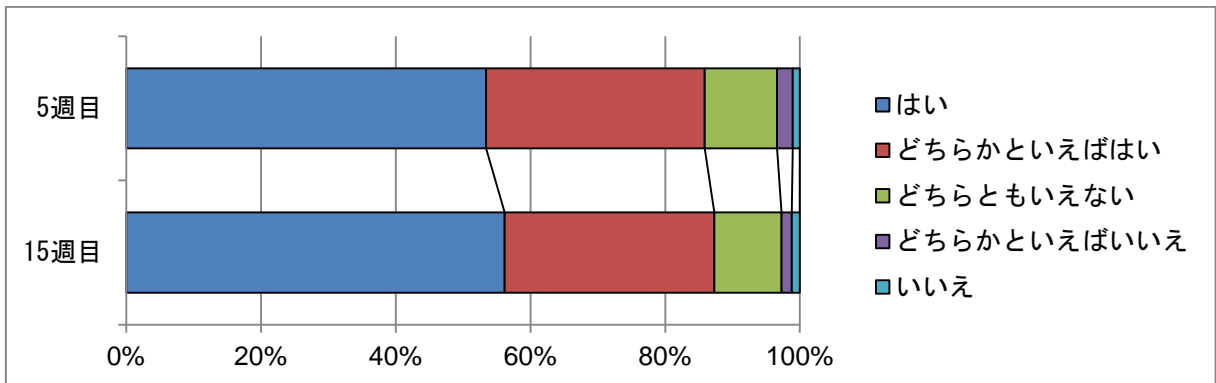


図 4. 分かりやすい授業をするよう努めているか.

5 週目で 50%を越える受講生が「はい」を選択していることから、アンケート実施授業は当初から受講生に分かりやすい授業を実施していたことが分かる。また、15 週目では「はい」の割合が増加し、「どちらともいえない」や「どちらかといえばいいえ」が減少していることから、各教員がこれまで以上に分かりやすい授業を行っていることが分かる。一方、「いいえ」の割合が微増していることから、授業が進むにつれ内容が高度化し、それについていけない受講生もいるものと思われる。

4. この授業で教員は、受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫をしていますか？

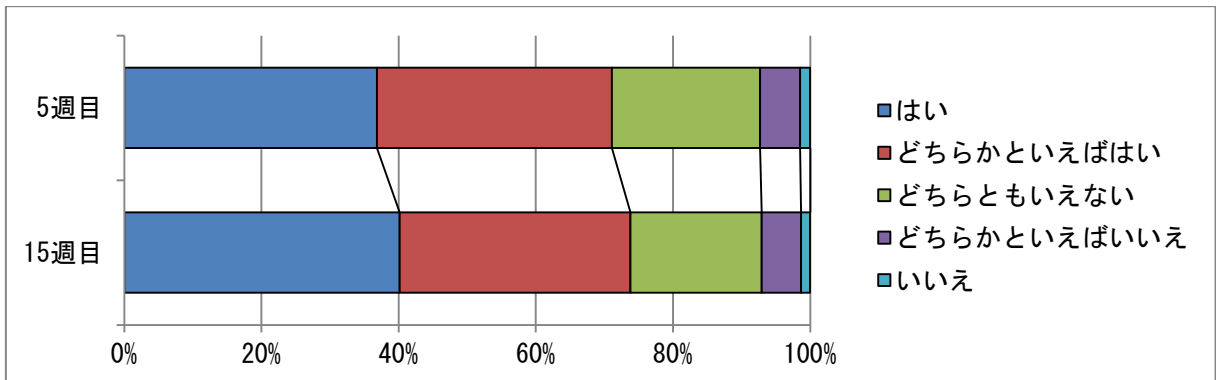


図 5. 意欲的・自主的な学びを引き出す工夫をしているか.

15 週目では「はい」の割合が増加し、「どちらともいえない」が減少していることから、各教員がこれまで以上に受講生の意欲的・自主的な学びを引き出す工夫を行っていることが分かる。しかし、否定的な意見の割合はほとんど変化していないことから、各教員が当初から意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫をしていたものの、5 週目以降に大幅な変更が行われなかったものと思われる。

5. この授業で教員は、授業をより良くするための試みをしていますか？

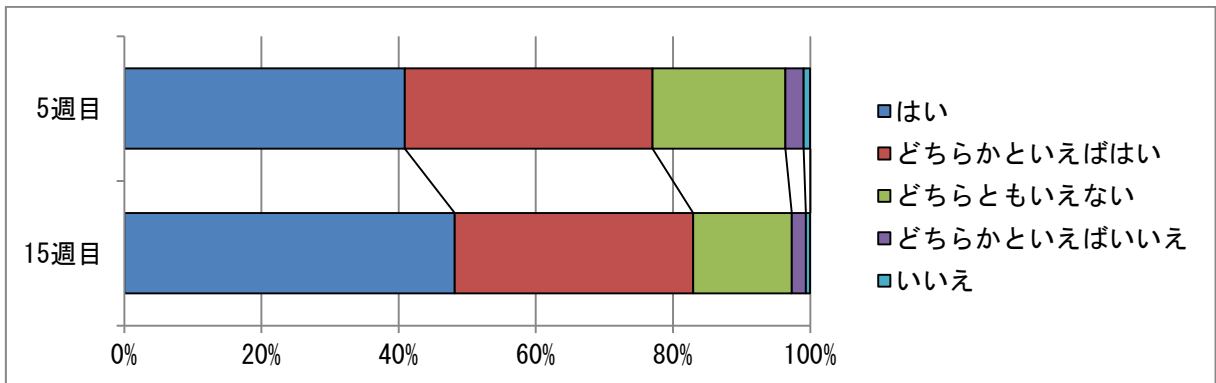


図 6. 授業をより良くするための試みをしているか.

15 週目では「はい」の割合が増加し、「どちらともいえない」や否定的な意見が減少していることから、各教員が授業をより良くするための様々な試みを行っていたことが分かる。

6. この授業は、総合的に考えて満足がいくものだと思いますか？

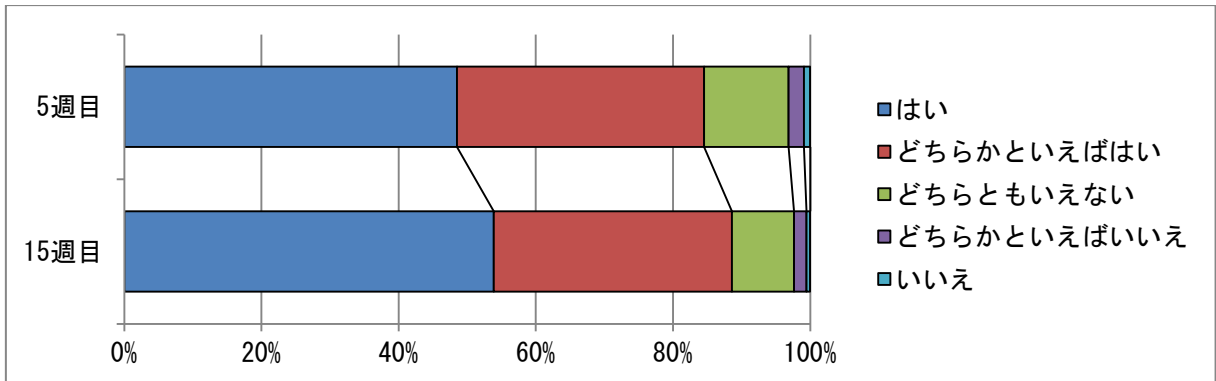


図 7. この授業は総合的に満足がいくものだと思うか.

15 週目では「はい」の割合が増加し、「どちらともいえない」や否定的な意見が減少しており、受講生の大半が満足していることが分かる。ただし、5 週目の時点で80%を超える学生が「はい」または「どちらかというとはい」を回答していることから、「授業改善アクションプラン」を実施して頂いた教員の多くは当初から様々な工夫を凝らして授業を実施されていたことが伺える。

【授業改善アクションプランの効果】

授業改善アクションプラン「〇〇〇〇〇」は、授業をより良いものにするために効果がありましたか？

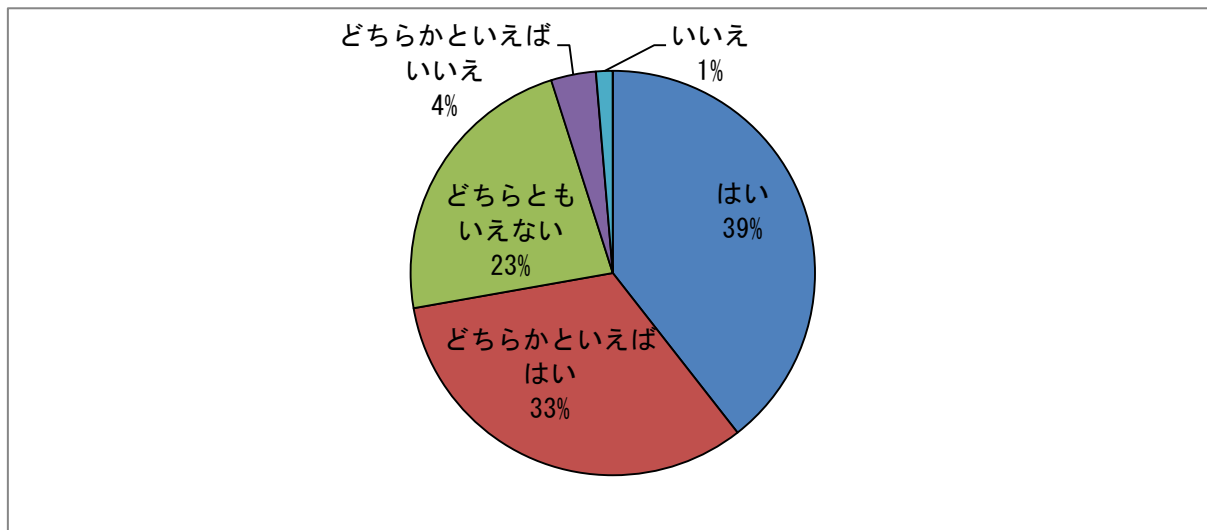


図 8. 授業改善アクションプランの効果.

本年度は総計 45 のアクションプラン(1授業あたり 1.1)が実施された。それらの効果について 15 週目アンケートで調べたところ、約 70%の学生が「はい」「どちらかといえばはい」を選択しており、一定の効果があったものと思われる。

【学生の諸能力の獲得(授業到達目標の達成)】

あなたは「●●●●●」を達成できたと思いますか？

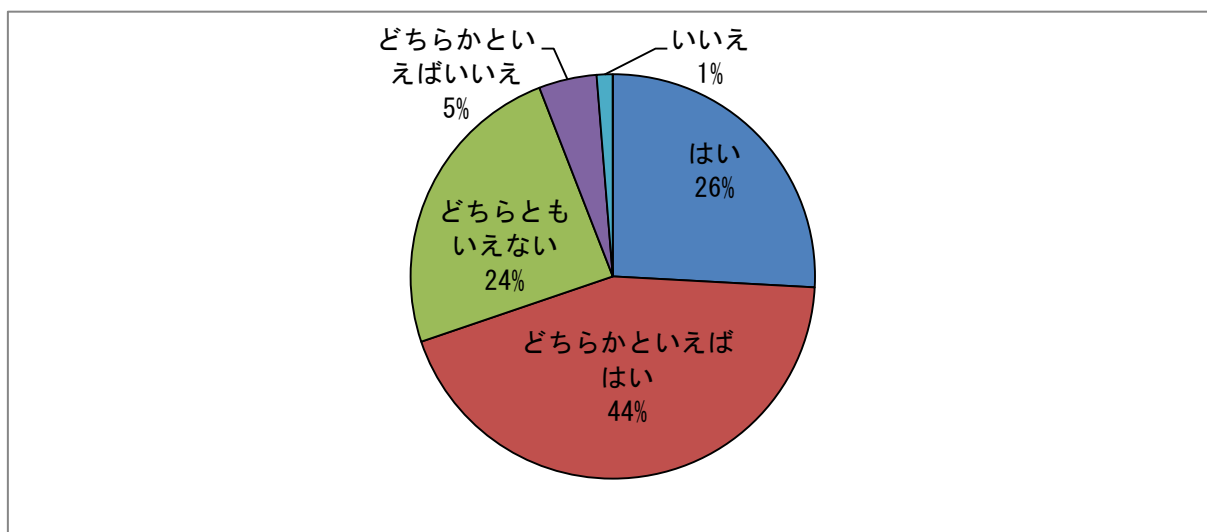


図 9. 授業到達目標の達成.

本年度は総計 114(1授業あたり 2.7)の項目について、その授業が掲げる目標に達したかどうかを 15 週目アンケートで調べられた。この結果、約 70%の学生が「はい」「どちらかといえばはい」を選択しており、学生自身は授業目標に到達していると考えているものと思われる。ただし、各受講生の成績との関連性は見ることができなかったため、各教員が望む本来の到達目標に達しているかどうかは今回のアンケートからは分からない。

【授業改善アンケートの効果と負担】

1. 授業改善のためのアンケートに回答することにより、受講生の声によって授業が改善されたと感じますか？

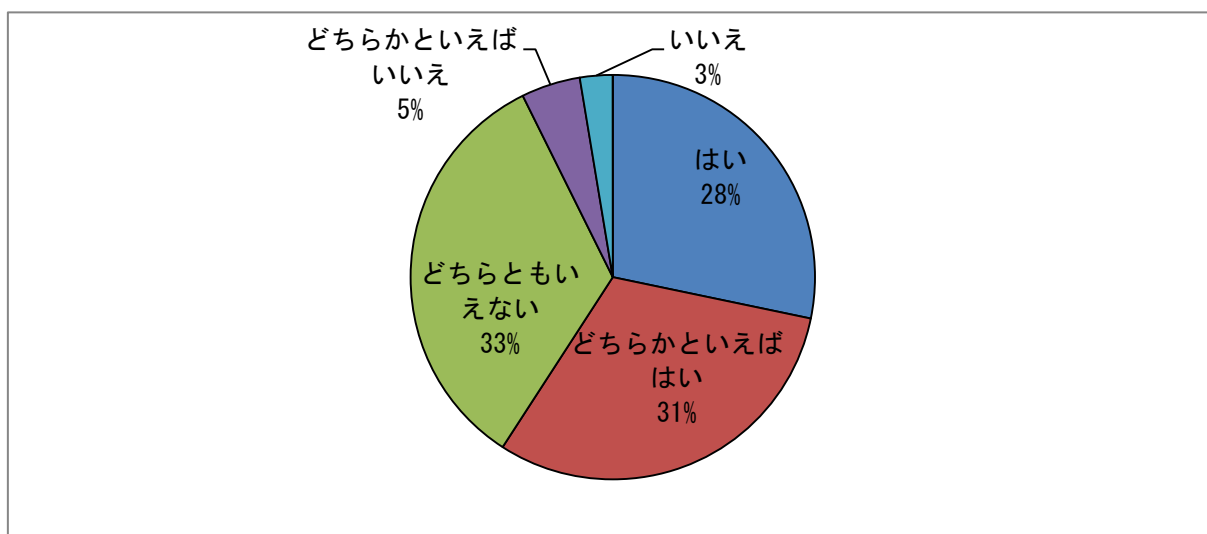


図 10. 授業改善アンケートの効果.

本年度は 60%弱の学生が「はい」「どちらかといえばはい」を選択していた。これに対し、否定的な意見は 10%未満となっていた。これらのことから授業改善アンケートの実施やこの結果を踏まえて各教員が提示したアクションプランが一定の成果をあげているものと考えられる。しかし、「どちらともいえない」と回答した学生が 33%にのぼる事から、アクションプランを作成する際、各教員が 5 週目で得られたアンケート結果をこれまで以上にしっかりと分析し、より効果的な内容にしていく必要がある。

2. 授業改善のためのアンケートに回答することを負担に感じましたか

本年度 5 月に実施された外部評価を受け、学生へのアンケート回答への負担軽減を目的に本年度 2 学期実施のアンケートから以下のような改善を試みた。

- ・アンケート回答時間短縮のため、KULAS を用いたアンケート内容の学生への事前通知
- ・教員に対して十分なアンケート回答時間確保の要請

これらの事項は、共通教育係を通して学生および教員へ 5 週目および 15 週目アンケート実施前

に連絡した。

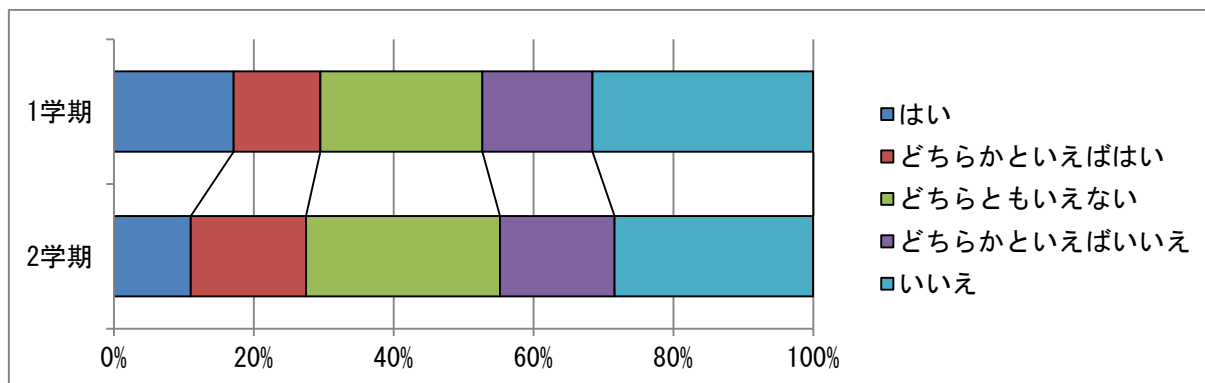


図 11. アンケートに回答することを負担に感じるか(割合)。

1 学期と比較し、2 学期ではアンケートに負担を感じている「はい」と回答した学生の割合は大幅に減少しているものの、アンケートに負担を感じていない「いいえ」と回答した学生の割合も減少していた。これは1学期 16 件、2学期 26 件と「授業改善アクションプラン」実施数が大きく異なるためである。そこで回答数で比較したものを以下に示す。

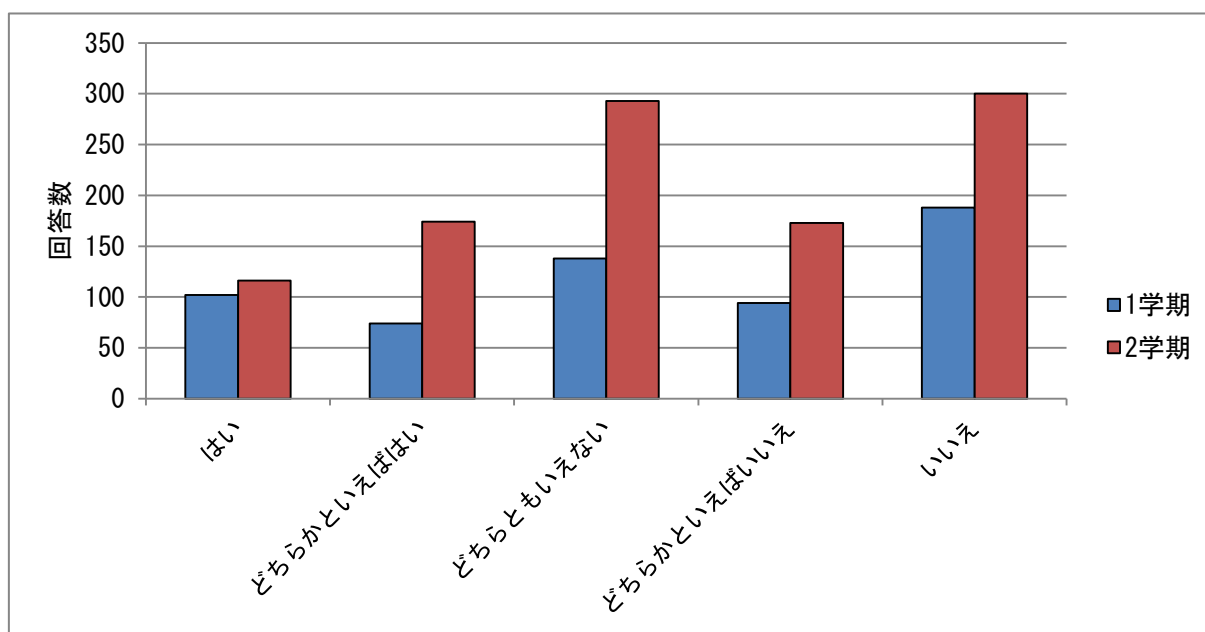


図 12. アンケートに回答することを負担に感じるか(実数)。

アンケート回答を負担に感じている回答数は1 学期と2 学期で大きく変わらず、負担軽減について一定の効果はあったものと考えられる。しかし、負担を感じていない「いいえ」や「どちらかといえばいいえ」の回答数が伸び悩んでいることから、さらなる対策が必要であろう。

【自由記述】

自由記述欄には、学生が感じた授業に関する様々な事項やアンケート項目にない意見、時に辛辣な意見も多く記載されているため、5 週目と15 週目でどのような違いがあるかを分析した。記載された内容には個人的な事項が含まれていたため、まずこれらを除外した。次に自由記述欄に記

載された文章をMeCabにより形態素(意味の最小単位)に分割し、10回以上出現した語の出現回数や文章内での出現パターンの類似性(共起)をKH Coderにより分析した。

5週目の自由記述

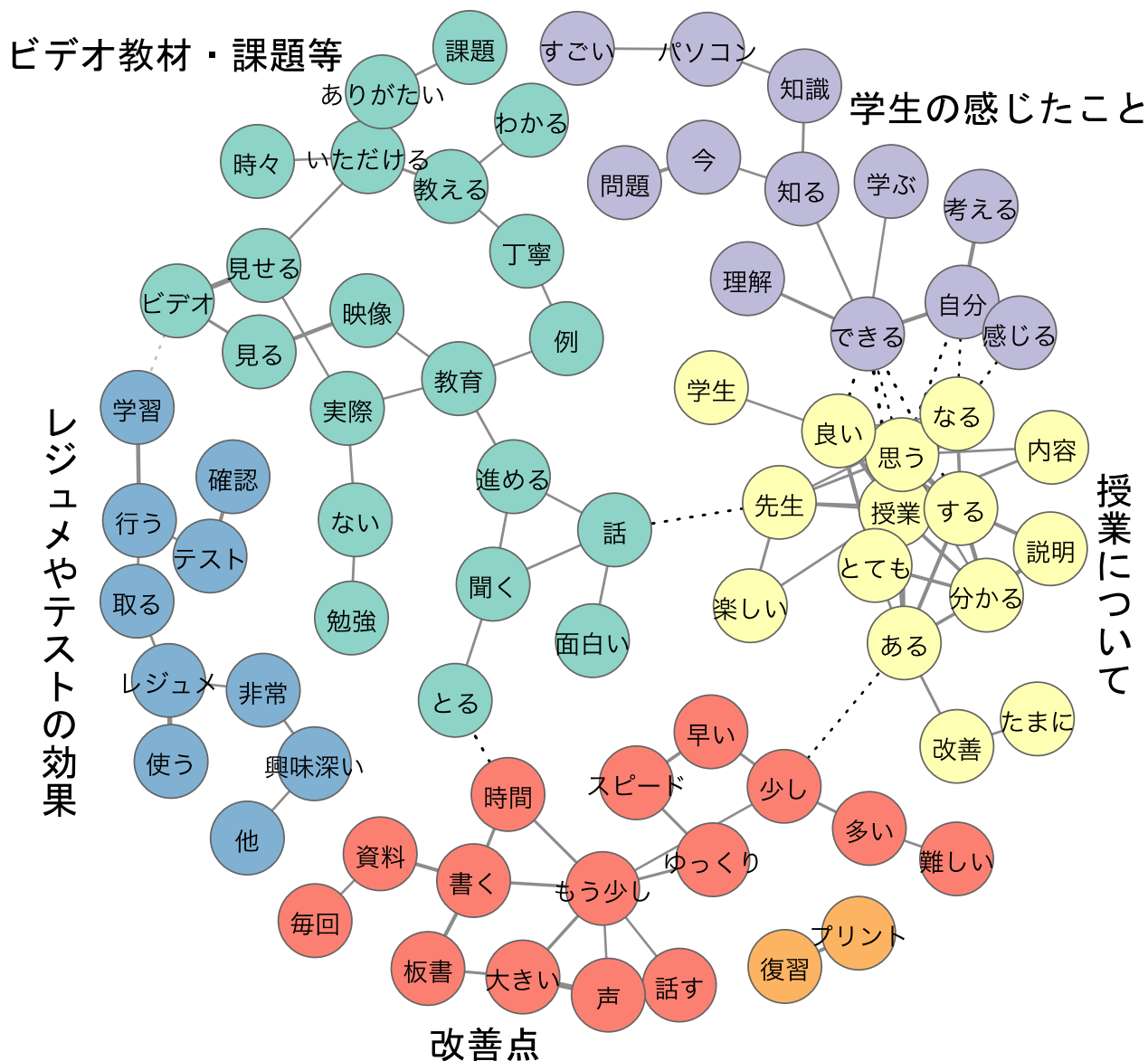


図 13. 5週目自由記述の共起ネットワーク. 文章内での出現パターンが類似した語について集団(クラスター)を形成するようまとめ、識別されたクラスター毎に色分けしている. 各項目を結ぶ線の太さは類似性の強さを示し、破線は弱い類似性を意味する.

5週目の自由記述は授業についての感想や学生が受講して感じたこと、レジュメやテストの効果、改善点など6つのクラスターに大別された。

現在の「5週目・15週目アンケート」には「しゃべり方」は「板書方法」など授業方法に関するテクニカルな設問がないため、この自由記述欄に記載する学生が多い。今回も板書の仕方や発声、

授業スピード、授業のレベル等の問題点の指摘が多いものの、「少し」や「もう少し」といった言葉との関連が強く、各教員が当初から意識して授業を実施していたことが伺える。一方、レジュメやテストの効果、ビデオ教材等の活用を高く評価していることも分かる。

15 週目の自由記述

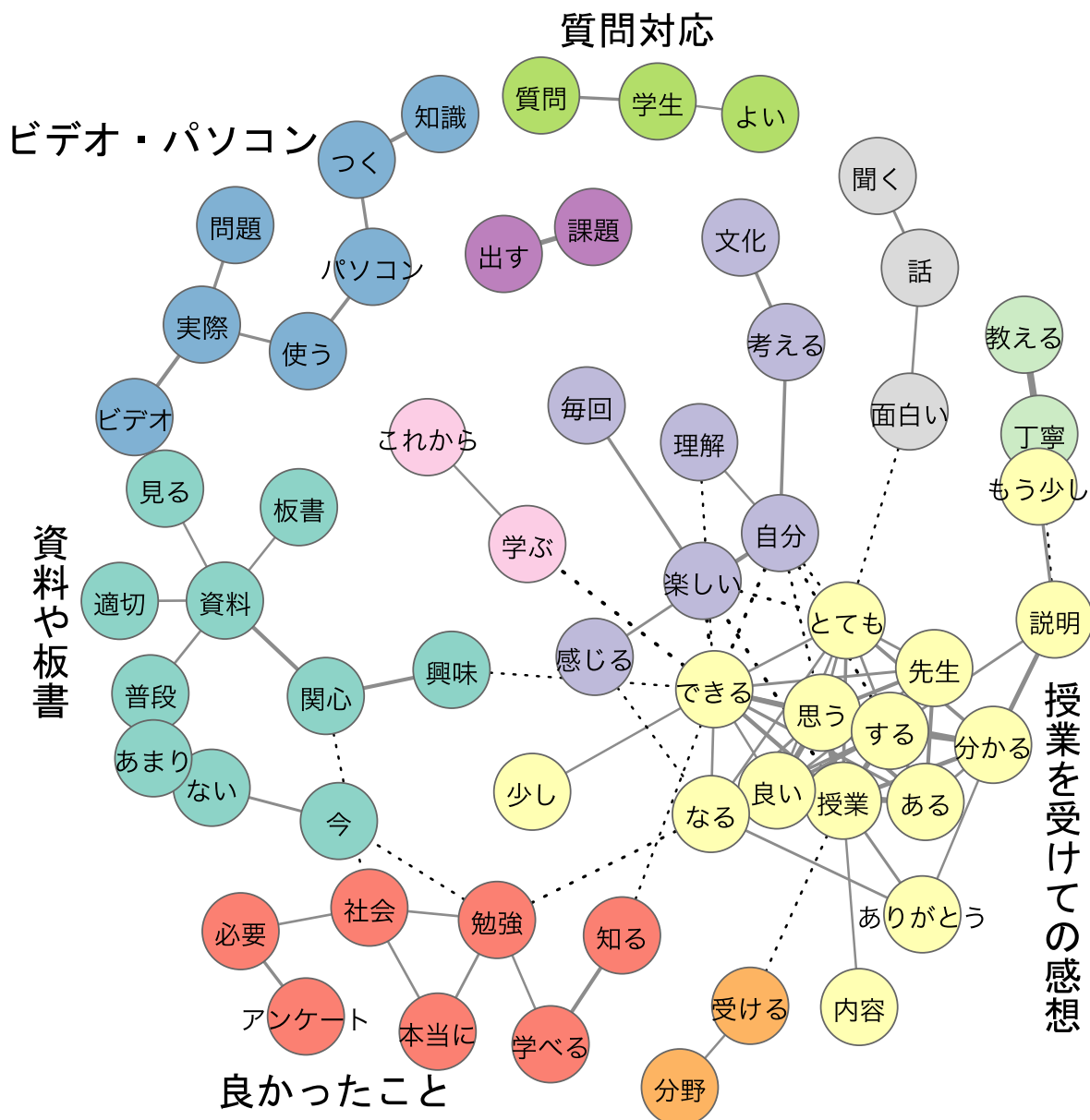


図 14. 15 週目自由記述の共起ネットワーク。

15 週目は 11 のクラスターが識別された。最も大きなクラスターは「授業を受けての感想」で、教員への感謝など 15 週目らしいものとなっている。

5 週目と比較し、15 週目では授業のテクニカルな問題点の指摘は極端に少なくなり、授業資料の効果や質問対応等を評価する声が多くなっていた。このことは 5 週目アンケートを受けて教員側が様々な対策を行い、そのことがしっかりと反映しているものと思われる。また、アンケートの必

要性について言及している学生も見られた。

まとめ

本年度の「授業改善アクションプラン」は、昨年度と比較し実施数がやや減少していたものの、アンケート分析から一定の教育効果をあげていることが明らかとなった。一方、授業担当教員は学期当初から様々な工夫を凝らしているため、15週目で大幅に改善された事項は少なくなっていた。また、受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫や受講生の声による授業改善についてはさらなる改善が求められる。

次年度の「授業改善アクションプラン」では

- ・実施授業数を増やす

- ・受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すためのさらなる工夫

を目標に実施することが望まれる。

3 課題探求実践セミナー分科会

課題探求実践セミナー副分科会長 藤内智士(理学部)

課題探求実践セミナーでは、教育効果を検討することを目的として、授業評価アンケートを毎年実施している。今回はその中の理学部の結果とそれに対する考察を以下に述べる。

質問紙は共通教育実施機構によって作られたもので、本セミナーにおいて継続的に用いられている。全授業共通質問は以下の6項目で、教育力向上3ヵ年計画に示されている5つの教育力に対応させた5項目および総合的な満足度を問う1項目で構成されている。

質問①:この授業で教員は、受講生の学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めているとおもいますか

質問②:この授業で教員は、受講生の知識・能力および授業に対するニーズを確認しながら授業を行っていると思いますか

質問③:この授業で教員は、受講生に分かりやすい授業をするように努めていると思いますか

質問④:この授業で教員は、受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫をしていると思いますか

質問⑤:この授業で教員は、授業をより良くするための試みをしていると思いますか

質問⑥:この授業は、総合的に考えて、満足がいくものだと思いますか

回答は5つの選択肢から選ぶもので、選択肢は中立的評価(どちらともいえない)を中心に、肯定的評価(はい・どちらかといえばはい)、否定的評価(いいえ・どちらかといえばいいえ)からなる。

調査は本セミナー終了時に1回実施された。対象は理学部教員が担当した3クラスの受講生であり、平成26年度は理学部1年生165名であった。

調査の結果

受講生165名の全員から回答が得られた。6項目の質問に対して、評価の分布が2種類に分かれたので、両者を比較する。

質問①と④と⑥は、肯定的評価が70%前後、中立的評価が15-20%、そして否定的評価が10%前後である。一方で質問②と③と⑤は、肯定的評価が55%前後と前者に比べて低く、中立的評価が30-35%、否定的評価が10-20%とやや高い傾向がある。

考察

質問①と④と⑥が、質問②と③と⑤に比べて肯定的評価が高かったことについて考える。

質問①と④は、受講生のやる気に関する項目である。質問⑥は授業への満足度である。これらの項目について肯定的評価を示した70%前後の受講生は、この授業に重要性ややりがいを感じたと判断できる。このことは、本授業がその役割(自ら課題を探求して実践する)を果たすように担当教員たちが取り組み、その効果が出ていると言える。

質問②と③と⑤は、受講生の学習を効率良く進めるための技術に関する項目である。これ

らの項目に対して、半数近い受講生が中立的評価あるいは否定的評価を示した。これは、課題の設定や実践に対して戸惑った者が多く、またそれに対する教員のサポートが十分でないと感じた者が多かったことを反映したと考える。

以上のことから、本セミナーの受講生が示した感想の一つを要約すると「本セミナーは重要だと思うしやりがいもある。ただし(あるいは、だからこそ)、もっと取り組みやすくするための教員のサポートが欲しい」となる。グループワークを通じて自分たちで課題を設定して解決していくという本セミナーの内容は、まさに研究活動そのものであり、研究活動は途中で行き詰まったり上手くいかなかったりするものである。そのことを体感するのも本セミナーの目的のひとつと言え、その点では担当教員たちは通常の授業とは異なり敢えて分かりやすい指示を与えなかった可能性がある。これは、本セミナーの目的として妥当であり、受講生の反応も一部は仕方がないのかもしれない。

また、そのような困難にもかかわらず、満足度について訊ねた質問⑥においては、70%を超える受講生が肯定的評価を示した。これは、途中の困難も含めた「難しかった。でも(だから)、面白かった。」的な達成感があつたことが効いていると考える(受講生コメント参照)。担当教員たちは受講生が気づかないように(自分たちで解決していったと思ってしまうくらいにさりげなく)補助をしていたのだとすれば、本セミナーにおいては理想的な教育である。

上記の内容は、あくまでもアンケート結果全体の大雑把な特徴である。それ以外の理由でこの授業を評価した受講生がいる可能性も当然ある。特に、質問⑥に否定的評価を示した受講生が9%いることについては、その理由や改善すべきかどうか、などをより詳しく検討する価値があると考えられる。

5 人文分野分科会

人文分野分科会副分科会長 日比野 桂(人文学部)

人文分野分科会では、平成26年度の自己点検・自己評価活動として1学期に4科目、2学期に5科目、合計9科目にて授業改善アクションプランを実施した。また、例年実施されている活動以外に、「教員独自に実施する学生からの意見取得」形式の自己点検・自己評価活動を実施した。具体的には、平成26年度1学期開講科目「心理学を学ぶ」(担当:人文学部・日比野桂)において、授業終了時に学生に意見や質問を確認し(資料1参照)、次回、それに対してフィードバックすることを毎回実施した。その上で第15回目にフィードバックが必要かについてアンケートにて確認した(資料2参照)。アンケートではその他に5週目・15週目アンケートと同様の内容を問い、フィードバックによる授業全体への影響も確認した(アンケートの結果は資料3参照)。意見や質問には「授業内容に関すること(内容からの派生も含む)」「授業方法に関すること(授業のスピードやスライドの見やすさなど)」「担当教員に関すること(心理学を専門とした理由など)」「授業と関係のないこと」などがあつたが、可能な限りフィードバックを行った。

受講生へのアンケートの結果は次のとおりであり、81%の学生が必要である(「どちらかといえば」も含む)と回答している(Fig 1)。必要な理由としては「疑問が解決される」「理解が深まる」以外にも「他の学生の質問・意見が参考になる」「前回の復習になる」といった理由が挙げられた。また、「質問・意見に答える場は必要だ」「疑問を放置するのは良くない」のようにフィードバックが当然といった反応も認められた。なお、必要ではない理由としては「担当教員の大変さ」「授業と関係のない内容が含まれる」が挙げられた(Table 1)。

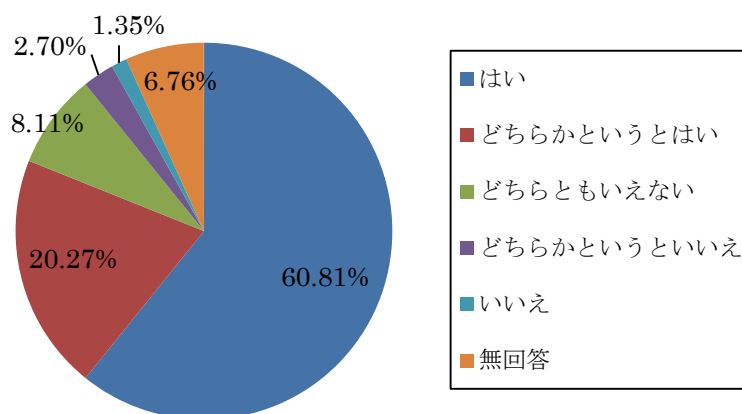


Fig 1. フィードバックが必要かの回答 (n=74)

以上より、意見・質問へのフィードバックは学生の疑問解決・理解促進につながる点で大いに意義があるといえる。また、教員にとっても授業での説明不足の点の確認にもなる。さらに、通常、5週目アンケートを行った上で改善結果を15週目で確認しているが、フィードバックは毎回自己点検・自己評価しているのと同じであり、学生の意見を踏まえ授業の改善を重ねられる方法といえる。一方、継続的な実施にはいくつかの課題があげられる。今回、実施した授業規模(100名程度の履修)でも意見・質問をまとめるためには毎回1時間半程度の時間を要し、講義中での意見・質問記入時間が毎回5~10分程度、フィードバックも毎回5~10分程度必要とされるため、

Table 1 フィードバックが必要かに関する理由

<p>はい</p> <p>面白かったから 聞いていておもしろい 同じところを疑問に感じてた点が明らかになったから 学生の疑問が解消される 疑問をうやむやにするのは良くないから 疑問を解消できるから 分からない所が聞きやすいから 興味がもてるから 質問・意見を言える 質問がしやすいから 授業に学生の意見が反映されることはいいことだと思うから ためになったから 知識が更に深まると思うから 自分が気づかなかったことを他の学生が質問してくれているので参考になる 他者の質問で学ぶことも多いから 他の人がどのように考えたかを知ることは大事だから 他の人の質問が参考になるか？ 他の人の質問で「なるほど」と思うこともあるため 他の人の心理学への考えを聞いて考えさせられることが多いから どんなことを感じたのか分かるから 授業の理解が深まるから 理解が高まるから 分からないことの確認 理解が深まるから 学生の意見に答える場は必要だと思うから 授業から派生して幅広い話ができるから 先生に親近感を感じるから 先生に対する質問などできるから 全然授業に出てない人がテストだけ出来て単位をもらえるのが不公平だから</p> <hr/> <p>どちらかというとはい</p> <p>おもしろいから。より知識を深められるから おもしろかったから 質問、疑問が解決されるいい機会だと思うから 前回何をやったか思い出せるから 自分が持てなかった疑問を他の人が質問していてより授業内容に興味を持てたから 生徒の疑問に答える場だから 生徒の疑問を放置するのは良くないと思うから</p> <hr/> <p>どちらともいえない</p> <p>授業に関係ない質問はそこまで必要ないと思うから</p> <hr/> <p>どちらかというといえ</p> <p>先生が大変だから 毎回のように講義内容に関係のないものが含まれているため</p>
--

注1 原文のままである。

注2 「いいえ」については理由の記載が見られなかった。

実際の授業時間が圧迫される。このように準備時間および授業時間をいかに確保するかという問題があげられる。また今回、文字のフォント・大きさ・太さ・色などを4・5回変更する事態となったように相反する意見もみられ、学生の多様な意見に教員が振り回される可能性が示された。さらに、必要のない理由にも挙げられた「授業内容とは関係のない」質問に対するフィードバックに関する問題がある。授業内容と関係ないことでもフィードバックにより学生の興味関心を高めることが出来る。学生の疑問解決・理解促進・興味関心の増加のためにどのような質問にどのように答えるか、教員の対応が問われるといえる。

上記のような課題は挙げられるが、総じてフィードバックは授業改善に有効な方法であると考えられる。また、授業が総合的に満足と答えた理由として「質問に答えてくれるから」という回答が複数みられ、「口頭だと質問しにくいので、質問を書く方法はありがたい」「学生への配慮を感じるから」といった回答もあった。他にも授業に関する自由記述において、「スライドの見やすさ」や「学生の意見や質問に答えてくれる」なども記述もみられた。このようにフィードバックは授業全体にも良い影響を与えており、学生の授業への参加意欲を高める手助けとなり、「授業改善アクションプラン」として実施されている「教員独自の学生からの意見取得」(感想や質問などの確認やフィードバック)は自己評価・自己点検活動として有効であるといえる。

心理学を学ぶ(02010) 2014年度1学期 出席確認票

氏名： _____

個人コード： _____

出席

第1回	第2回	第3回	第4回	第5回

第6回	第7回	第8回	第9回	第10回

第11回	第12回	第13回	第14回	第15回

- ※1 意見・質問の記述は、強制ではない。
- ※2 1回の講義で15前後の意見や質問があった。

共通教育「心理学を学ぶ」アンケート

このアンケートは、今後この授業を改善するために受講生の意見を聴くものです。
 教員を評価するものではなく、また皆さんの成績に関係するものでもありません。
 その点をよく理解した上で、この授業を良くするという観点から、適切な回答をお願いします。

	どちらかというとい	え		どちらかというとい	え
	どちらともいえない			どちらともいえない	
はい					いいえ
はい					はい

【全授業共通質問】

★下記の質問に、はい①～いいえ⑤の5段階評価で回答して下さい。

また、そのように回答した理由を答えて下さい(理由は複数回答可)。〔いずれも回答番号を塗りつぶして下さい〕

1. この授業で教員は、受講生の学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めていると思いますか ①授業で学問の最先端に触れる話をしている ②授業で学問の最先端に触れる話をしていない ③授業内容が学問や社会の現代的課題に込えている ④授業内容が学問や社会の現代的課題に込えていない ⑤授業内容が受講生の関心・興味に合っている ⑥授業内容が受講生の関心・興味に合っていない ⑦その他→()	① ② ③ ④ ⑤ (⑦にチェックした方は左の()に理由を記述して下さい)
2. この授業で教員は、受講生の知識・能力や興味・関心を確認しながら授業を行っていると思いますか ①シラバスに受講に当たって求められる能力などを明示している ②シラバスに受講に当たって求められる能力などを明示していない ③授業開始時または授業期間中に学生の能力やニーズに関する調査(アンケートや小テストなど)をしている ④授業開始時または授業期間中に学生の能力やニーズに関する調査(アンケートや小テストなど)をしていない ⑤受講生の反応を見ながら授業を行っている ⑥受講生の反応を見ながら授業を行っていない ⑦学生の理解度を確かめるような問い掛けをしている ⑧学生の理解度を確かめるような問い掛けをしていない ⑨その他→()	① ② ③ ④ ⑤ (⑨にチェックした方は左の()に理由を記述して下さい)
3. この授業で教員は、受講生に分かりやすい授業をするように努めていると思いますか ①授業の目的・目標を明確にしている ②授業の目的・目標を明確にしていない ③声の大きさや話し方が適切である ④声の大きさや話し方が適切でない ⑤説明の仕方が適切である ⑥説明の仕方が適切でない ⑦授業を進める速度が適切である ⑧授業を進める速度が適切でない ⑨配布資料・視聴覚資料・教材などが適切である ⑩配布資料・視聴覚資料・教材などが適切でない ⑪板書が適切である ⑫板書が適切でない ⑬その他→()	① ② ③ ④ ⑤ (⑬にチェックした方は左の()に理由を記述して下さい)
4. この授業で教員は、受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫をしていると思いますか ①授業の予習・復習を促している ②授業の予習・復習を促していない ③学生が時間外学習を行うための課題を提示している ④学生が時間外学習を行うための課題を提示していない ⑤学生の自主的学習に対する助言や支援をしている ⑥学生の自主的学習に対する助言や支援をしていない ⑦質問に対して丁寧に答えている ⑧質問に対して丁寧に答えていない ⑨課題やレポート提出物に対してフィードバックをしている ⑩課題やレポート提出物に対してフィードバックをしていない ⑪授業に参加型学習を取り入れている ⑫授業に参加型学習を取り入れていない ⑬その他→()	① ② ③ ④ ⑤ (⑬にチェックした方は左の()に理由を記述して下さい)
5. この授業で教員は、授業をより良くするための試みをしていると思いますか ①授業を良くするための工夫や熱意が感じられる ②授業を良くするための工夫や熱意が感じられない ③アンケートやレポートで得た意見を授業に反映させている ④アンケートやレポートで得た意見を授業に反映させていない ⑤学生に対して授業を良くするために「皆さんには～～して欲しい」といった努力を求める要求をしている ⑥学生に対して授業を良くするための努力を求める要求をしていない ⑦その他→()	① ② ③ ④ ⑤ (⑦にチェックした方は左の()に理由を記述して下さい)
6. この授業は、総合的に考えて、満足がいくものだと思いますか 【回答の理由】	① ② ③ ④ ⑤ 左に理由を記述して下さい

	どちらかというとい	え		どちらかというとい	え
	どちらともいえない			どちらともいえない	
はい					いいえ
はい					はい

【授業別の質問】

1. 出席確認票の質問・感想へのフィードバックは必要だと思いますか? 【回答の理由】(必要だと思う人はその理由、必要ではないと思う人はその理由をお答えください)	① ② ③ ④ ⑤
2. 毎回の授業の量は多いと思いますか?少ないと思いますか?①多い⇔⑤少ない	① ② ③ ④ ⑤

裏に続きます⇒⇒⇒

【自由記述】

1. この授業の進度や内容、教員の説明や指示などについて気がついたことがあれば書いてください。

2. この授業で使用された教科書やプリント、パワーポイント資料などの教材について気がついたことがあれば書いてください。

3. この授業で学習意欲を向上させた教員の言動があれば書いてください。

4. この授業で学習意欲を低下させた教員の言動があれば書いてください。

5. その他、あなたが、この授業に関して感じていることを、自由に記述して下さい
とくに、この授業の「良い点」および「改善して欲しい点」について、強く感じていることを記述して下さい

ご協力ありがとうございました

資料 3

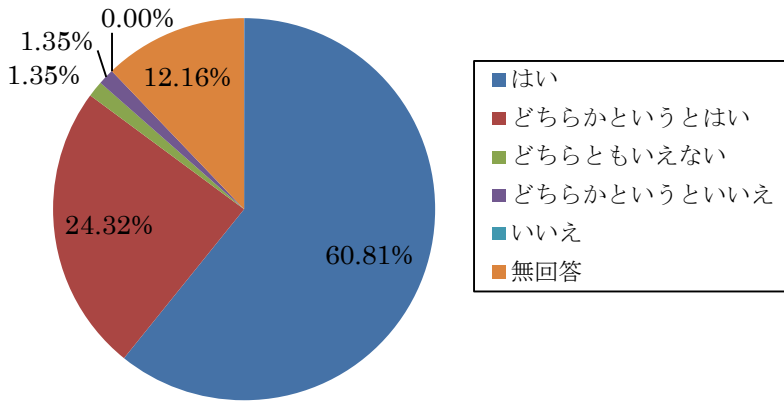


Fig 1. 学問的関心・知的好奇心を高める授業かの回答 (n=74)

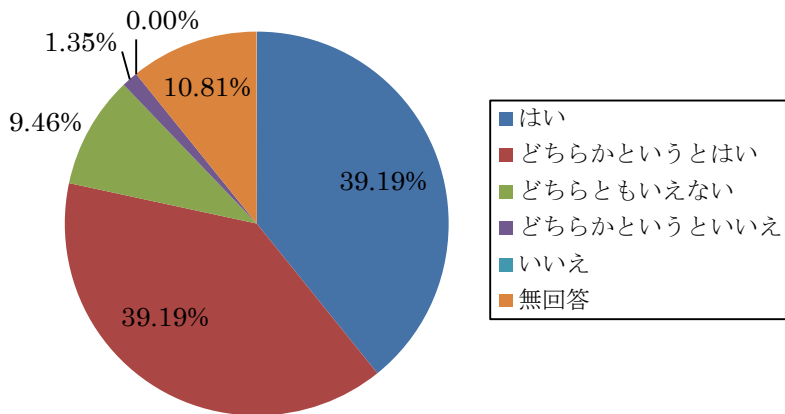


Fig 3. 知識・能力や興味・関心を確認についての回答 (n=74)

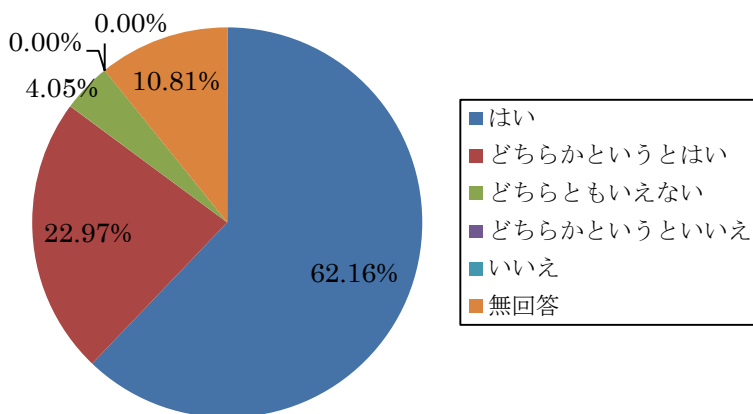


Fig 5. 分かりやすい授業かの回答 (n=74)

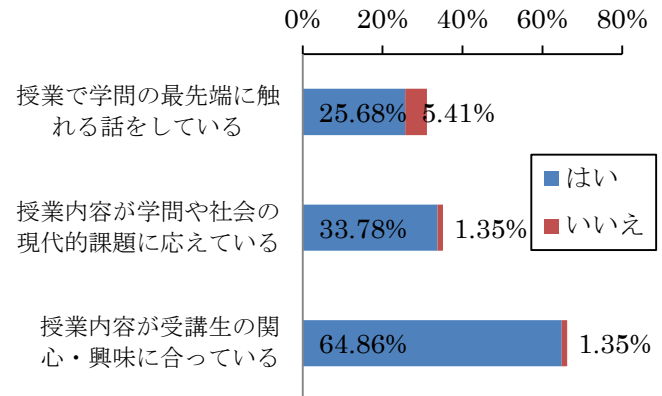


Fig 2. 学問的関心・知的好奇心を高める理由 (n=74)

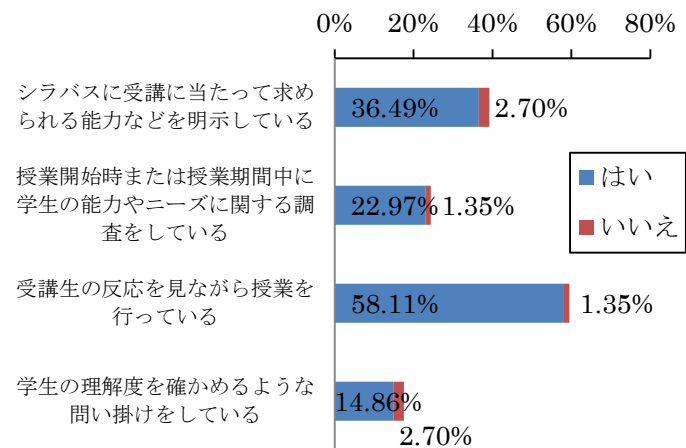


Fig 4. 知識・能力や興味・関心の確認の理由 (n=74)

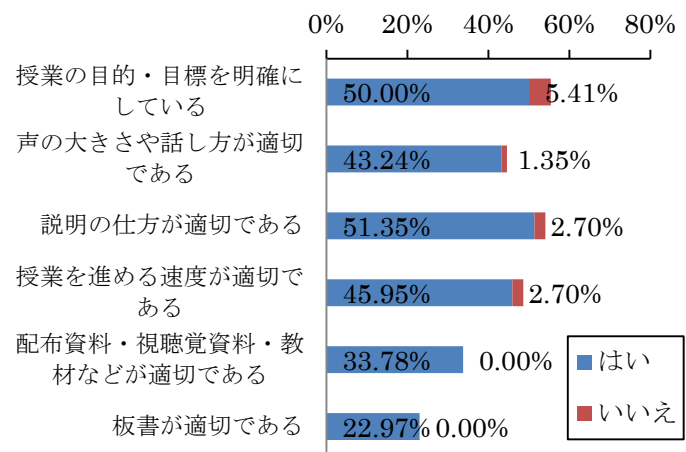


Fig 6. 分かりやすい授業の理由 (n=74)

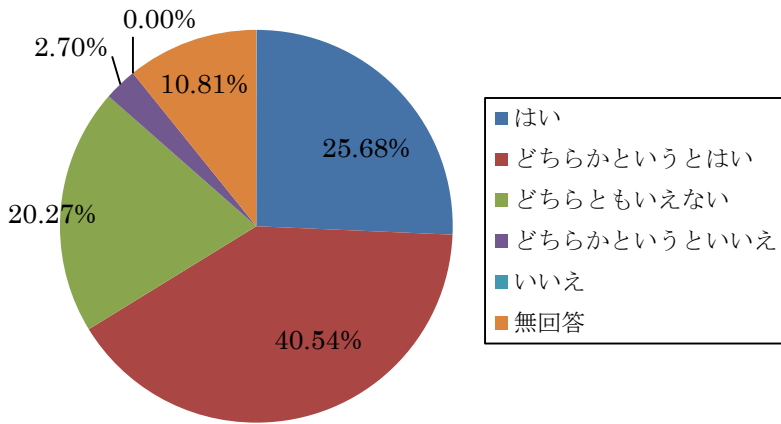


Fig 7. 意欲的・自主的な学びの促進についての回答 (n=74)

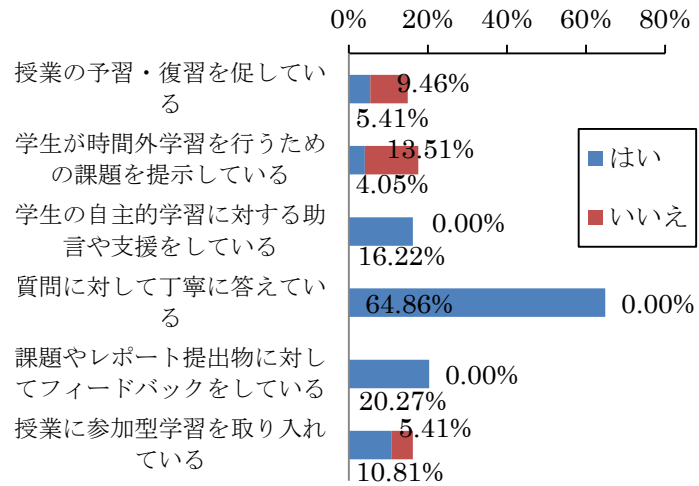


Fig 8. 意欲的・自主的な学びの促進の理由 (n=74)

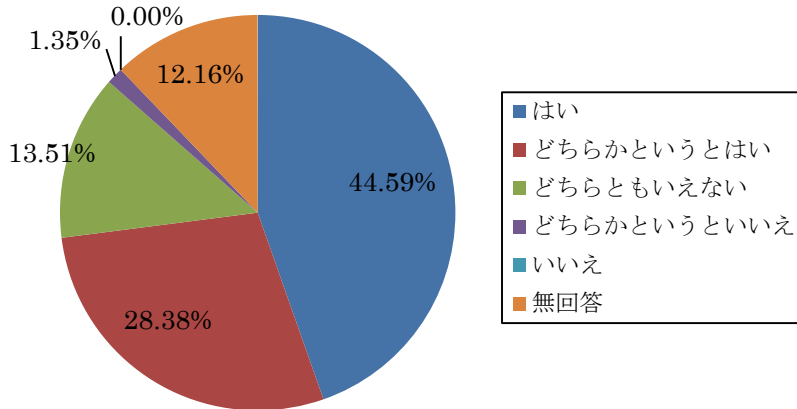


Fig 9. 授業改善の試みについての回答 (n=74)

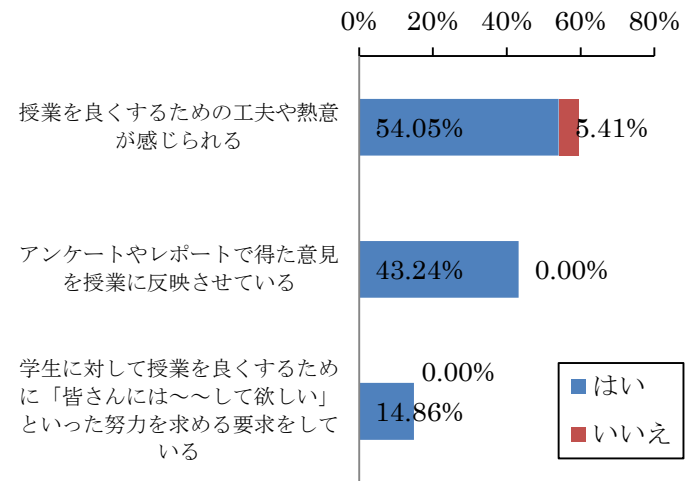


Fig 10. 授業改善の試みの理由 (n=74)

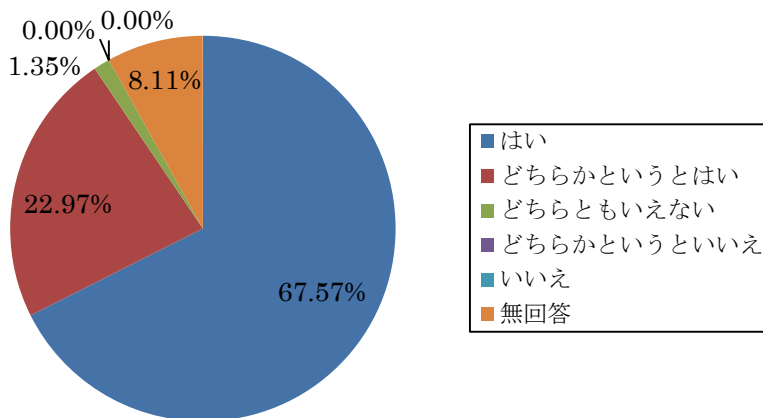


Fig 11. 授業の総合的満足についての回答 (n=74)

7 生命・医療分科会

生命・医療分科会副分科会長 高橋 美美(医学部)

1. 平成26年度「健康」

(1) 授業評価アンケートー15項目における5段階評価の結果より

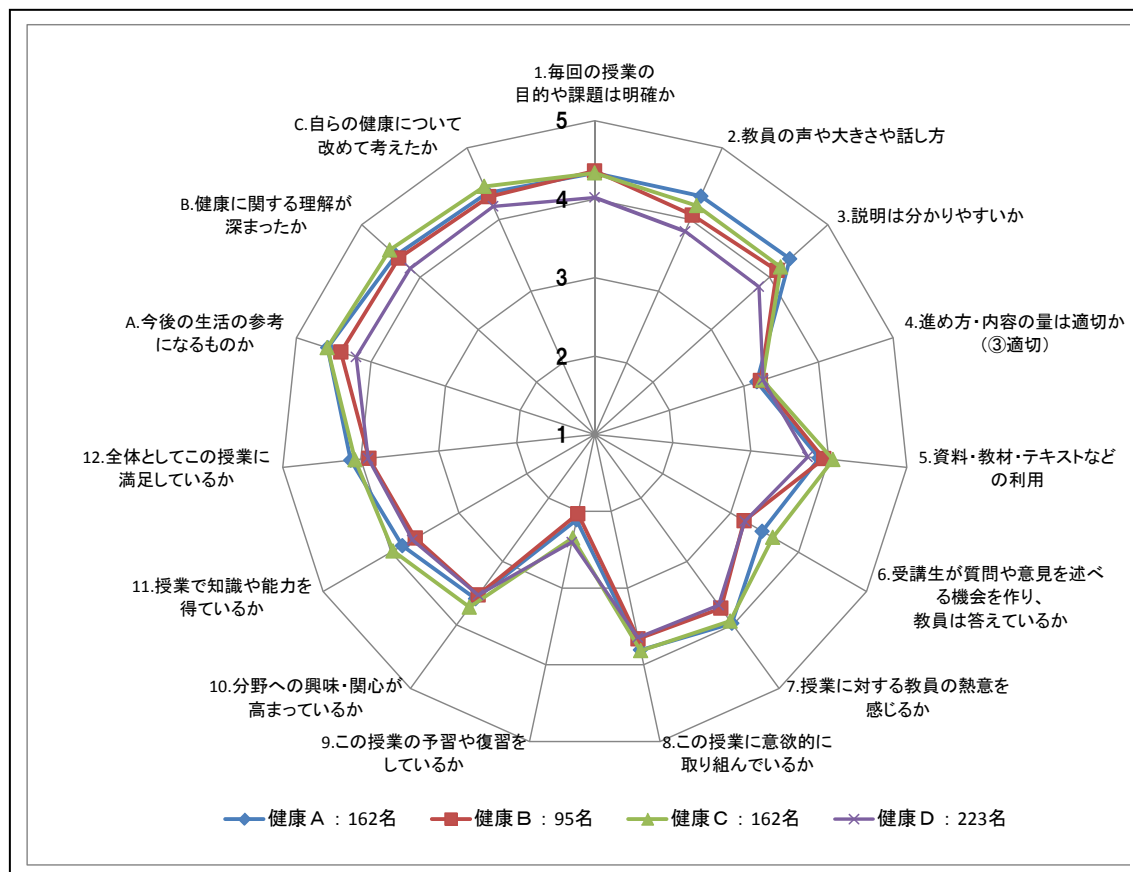


図1 平成26年度「健康」4クラスの授業アンケート結果

平成26年度1学期に行われた「健康」AからDクラスを対象として、学生による授業評価アンケートを実施した。4クラスの各質問項目(5段階評価)の平均値を図1に示す。

今年度は、回答者数(受講者数, 対する回答率)は、A:162名(221名, 73.3%), B:95名(158名, 60.0%), C:162名(189名, 86.8%), D:223名(280名, 79.6%)であり、総回答数は664名(848名, 75.9%)となっている。

今年度はクラス毎の回答率にばらつきがあるため単純比較はできないが、受講者数250名を超えるDクラスの回答が目立って低い項目が6項目(問1,2,3,A,B,C)あった。ほぼすべての質問項目で各クラスの受講生数と反比例していた昨年度の評価に比べると、やや好転している面もみられるが、残るこれらの項目では、学習環境面からも200名を超える大規模クラスのままでは改善の厳しさもうかがえる内容と考えられる。

また、平成 21～26 年度の経年的変化は図 2 となっており、この数年と同様の傾向であった。例年、予習・復習をしている者が少ない結果の中で、本年度はやや高いものとなっている。一方、「今後の生活の参考になるものか」「健康に関する理解は深まったか」「自らの健康について改めて考えたか」については毎回、高い評価を得ている。本授業はオムニバス形式であることから予習がしづらい面があるが、健康を身近な課題として学べた状況が共通して認められる。

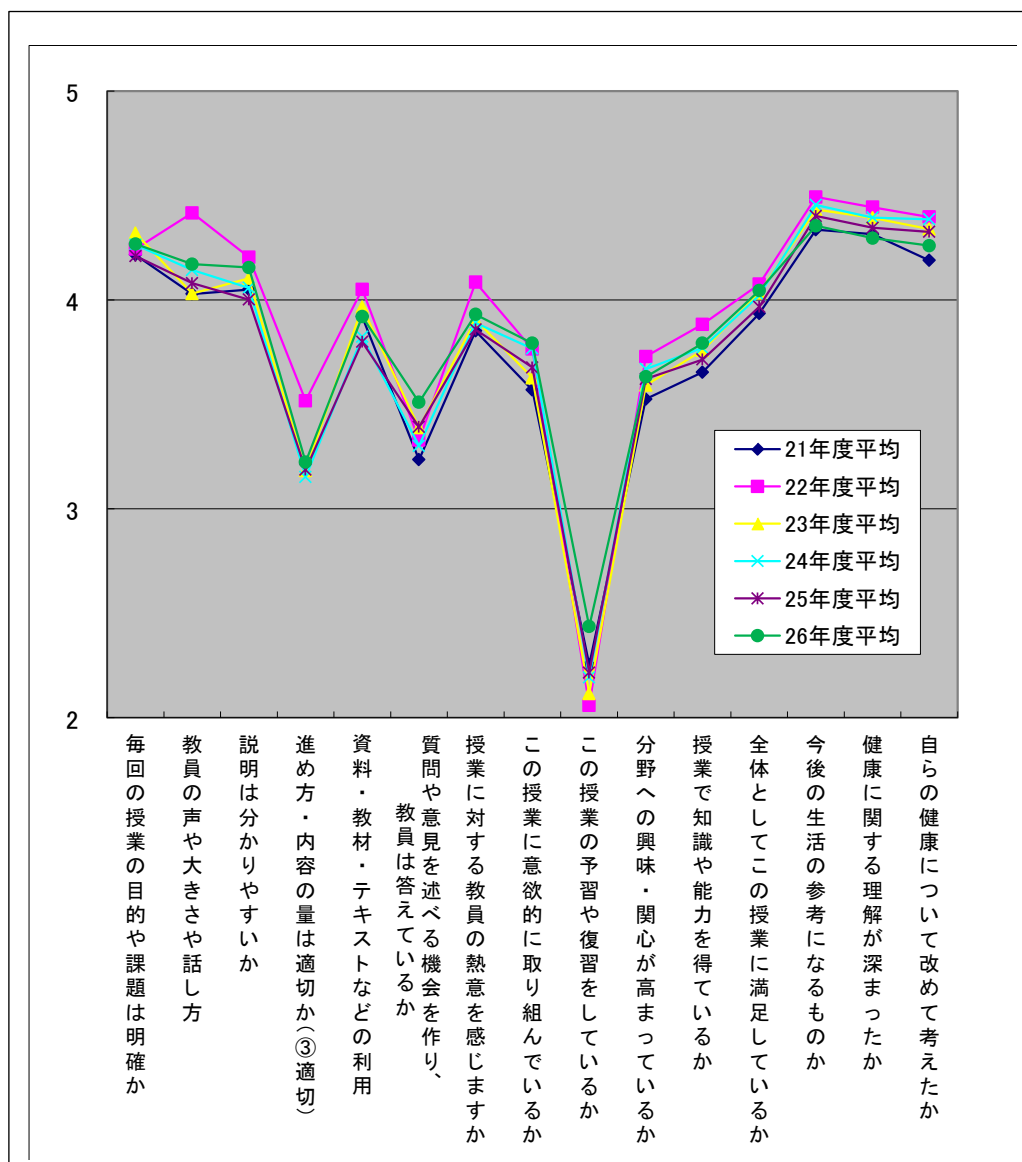


図 2 平成 21～26 年度「健康」4 クラスの授業アンケート平均値の変化

(2) 授業評価アンケートー自由記載欄より

平成 26 年度は、4 つのクラスの回答(計 664 名)のうち、295 名の自由記載欄の回答を得た。その回答記述データを類似内容ごとに整理し、得た要素と回答人数を、表 1 ならびに表 2 に示す。記載者数から、ごく一部の意見に過ぎないものではあるが、改善を要する点や学生の学びにつな

がっている面がうかがえ、5段階評価の結果を裏づけるような傾向であった。これらから、必ずしも受講の動機づけが十分ではない学生に対して、各担当教員の様々な工夫がその学びにつながっていることが評価されると同時に、大規模クラスによるところも大きい学習環境の課題点などに、今後どのように取り組むことができるのかを検討していく必要があると考える。

表1 ネガティブな内容を示すデータについて

内容	人数
【資料について】 ・スライドが見づらい、切り替えが速い時がある	5
【講義内容について】 ・内容に重なりがある ・聞き取りにくい、わかりづらい時がある(話し方・専門用語) ・熱意や難易度にばらつきがある	3 3 2
【評価・出席等について】 ・テストの有無が担当者によって違う ・出席のとり方	1 2
【受講生の受講態度について】 ・受講態度が悪い(私語・途中入室)	6
【環境面について】 ・人数が多すぎて集中しづらい ・冷房が効きすぎている時がある ・工事の騒音 ・照明が明るくてスライドが見づらい	2 2 1 1

表2 ポジティブな内容を示すデータについて

内容	人数
自身の健康に結びつけた理解と今後への動機づけになった	109
様々な分野から幅広く学べた(多角的)	40
必要な知識が得られた、深まった	34
興味深い内容だった	10

最後に、平成26年度の授業評価アンケート自由記載欄での目立った意見を一部抜粋して、以下に示す。

- 健康の授業を通して、自分の常識がやぶられたり、新たな知識が得られたりと、一時間一時間が刺激的であった。自分との関わり方、人との関わり方などこれから大学生活をすごしていくなかで必要なことを得られた。
- 運動や生活習慣に気をつけることは、当然であると頭でわかっていたが実行するのはむずかしい。しかし、この授業でこれらのことを改善しないと自分の身体がどうなっていくのか具体的に知れて気をつけようという気持ちになった。
- オムニバス形式の授業を初めて受けたので新鮮で面白く聞けました。様々な分野の健康をかみくだいて説明していただいていたのでとても素直に、興味をもって講義をうけることができました。
- 健康になるためにすればいいことを教える授業だと思っていましたが、もっと深さまざまな分野が「健康」にはあるんだと知りました。専門的な話が聴けたことがよかったです。また、身体的健康だけでなく精神的健康についても理解できました。
- 今まで中学、高校での保健の授業で学習したことと同じことだと思っていたが、それよりも内容が深く、また以前学習したときに感じたことはまた別のことも感じることでとても有意義な時間だったと思う。
- 教養科目として、仕方なくこの講義をとったのだが、思っていたよりも自分たちのためになるという点で、とても興味深く楽しめた。
- あまり関心がなかったが、15回の授業を通して少しずつ興味がわいてきた。

11 スポーツ・健康分科会

スポーツ・健康分科会副分科会長 野田 智洋(医学部)

1. スポーツ科学講義

平成 26 年度は、岡豊キャンパスで行われた講義において、1 学期は通常の学期末授業評価アンケートを、2 学期に 5 週目アンケート、アクションプラン、15 週目アンケートによるプラン実施の効果検証を実施した。しかし、これについては、実施対象者が特定されるため報告書への記載は見送ることとする。また、朝倉キャンパスで 2 学期に行われたスポーツ科学講義 A から D では授業評価アンケートを実施できなかった。

2. スポーツ科学実技

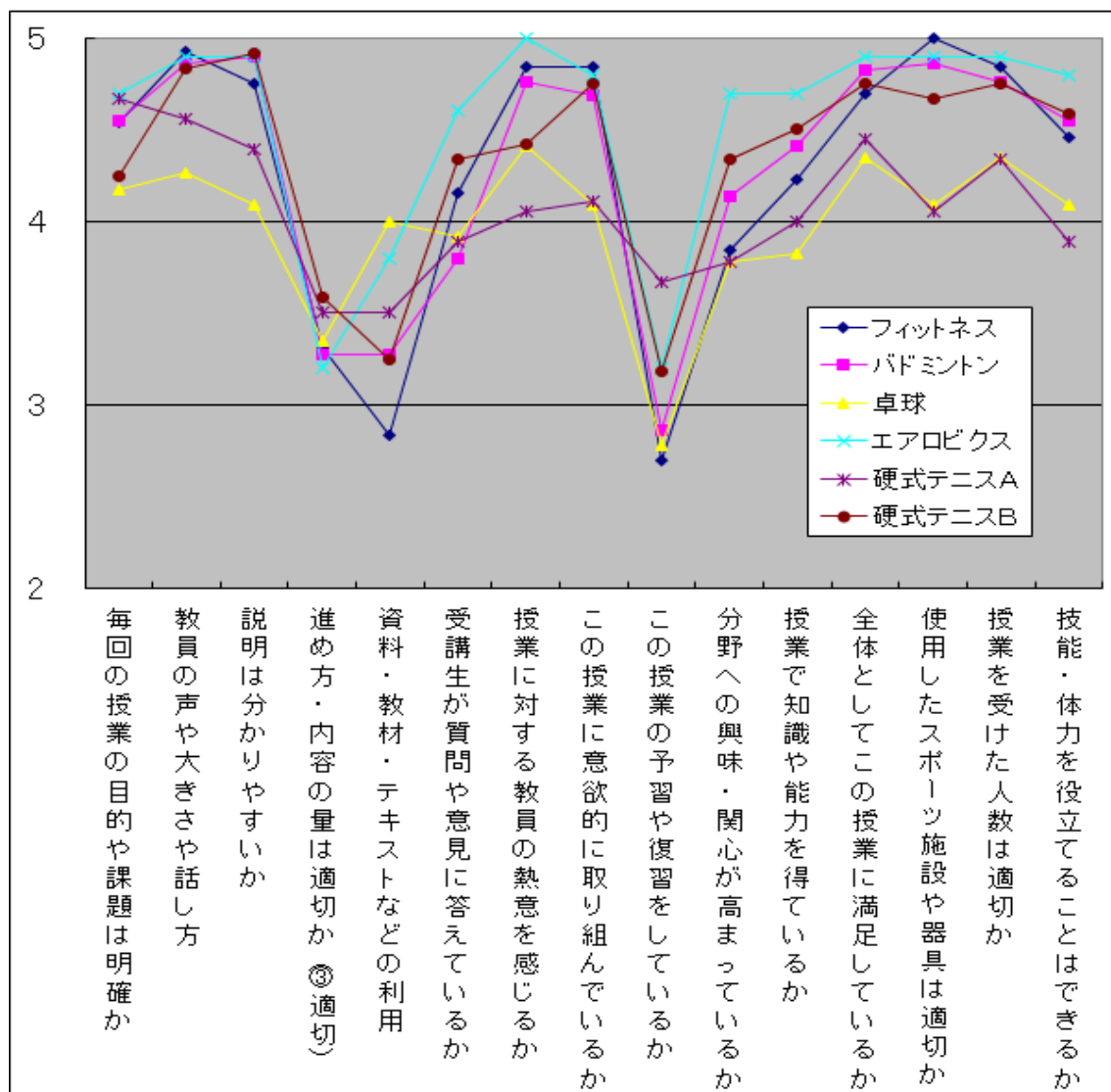


図1 平成 26 年度 1 学期授業評価アンケート集計結果

今年度 1 学期は、朝倉キャンパスのすべての授業で授業評価アンケートを実施した。種目は、フィットネス、バドミントン、卓球、エアロビクス、硬式テニスA、硬式テニスBである。

対象となった6科目の学生満足度(設問13)「全体としてこの授業にあなたは満足していますか」の評価は、卓球が4.35とやや低いものの、エアロビクスが4.90、バドミントンが4.83、フィットネスが4.69、2科目ある硬式テニスが4.75と4.44であり、総じて高く評価されている。しかし、図1のように、(設問6)配付資料や視聴覚教材の利用が適切かどうか、(設問10)この授業の予復習をしているかどうか、に関しては低い評価がなされている。これら2問については、いずれの種目でもほぼ同様の傾向が認められ、授業方法に問題があるというよりは、スポーツ実技という科目特性に附帯する要因であると考えられる。全体の傾向としては、例年と同様である。

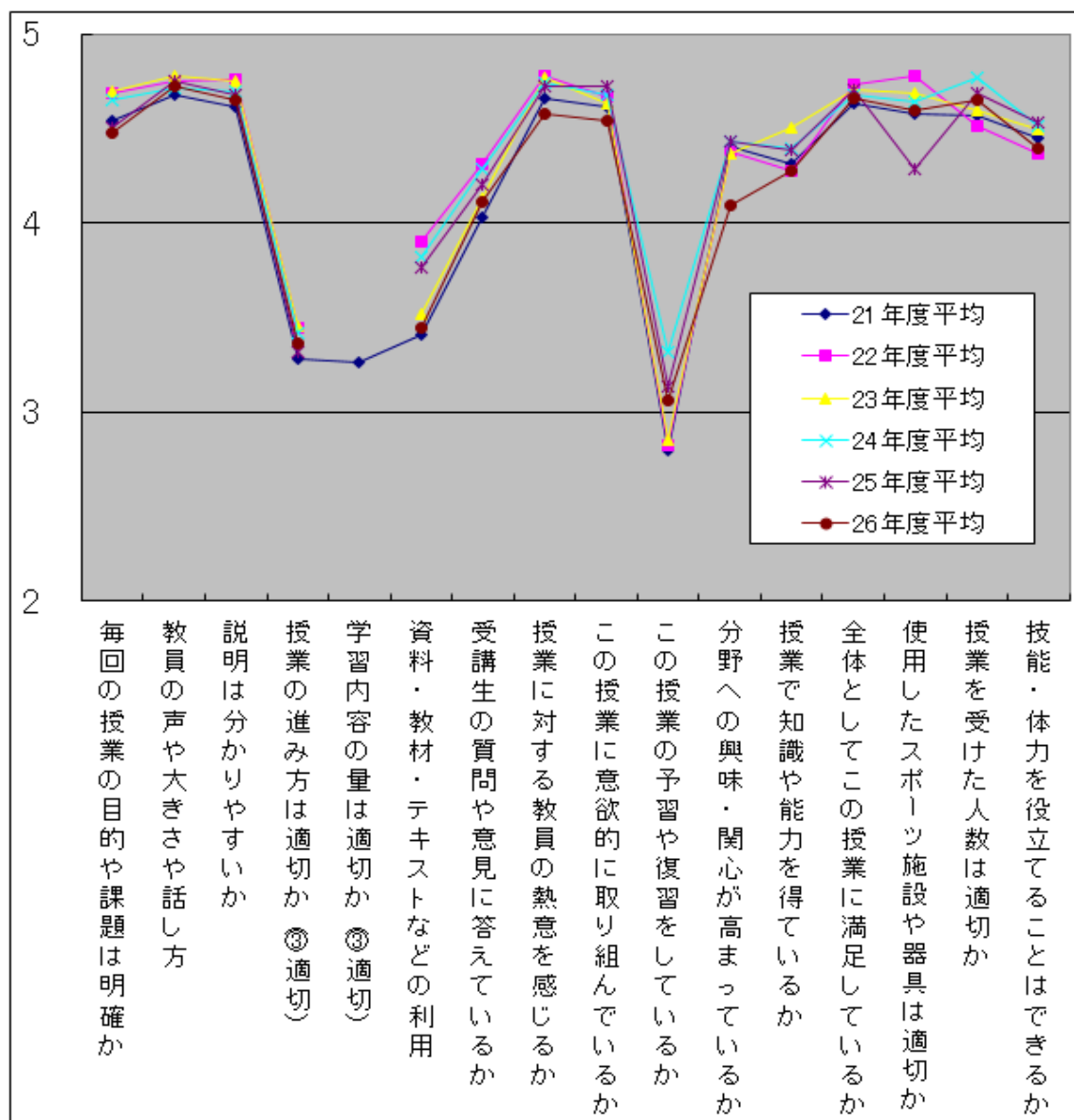


図2 平成21年度から26年度の学期末授業評価アンケート集計結果

図2は、平成21、22年度に開講された15種目、ならびに23、24、25年度1学期7種目の授業評価アンケート平均値を比較したものである。なお、22年度以降「学習内容の量は適切か」との質問項目が、「授業の進み方や内容、量は適切か」との質問項目に統合されている。

図のように過去6年間の傾向は大きく変わっていない。設問10の予復習に関する質問項目に対する評価が低いですが、図1の分析と同様、実技という科目特性によるものと考えられる。23年度

は「授業で知識や能力を得ているか」との質問に対する回答が 4.51 と過去最高を記録したが、24、25年度は残念ながら4.40に低下し、26年度はさらに低下しているのが気になるところである。さらに「この分野への興味・関心が高まっているか」の項目で平成26年度は従来から大きくポイントが下がっており注意が必要である。

現在のところ、授業に対する教員の熱意、学生の意欲ともに高い評価を維持しながら推移しており、特別な支援や対策を講じる必要はないと考えられる。しかしながら、実技を選択する学生の減少に歯止めがかかっておらず、各学部学科の必修科目の時間割を調べるなどして、実技科目の時間割を履修しやすい曜日に変更するなどの対策が必要である。

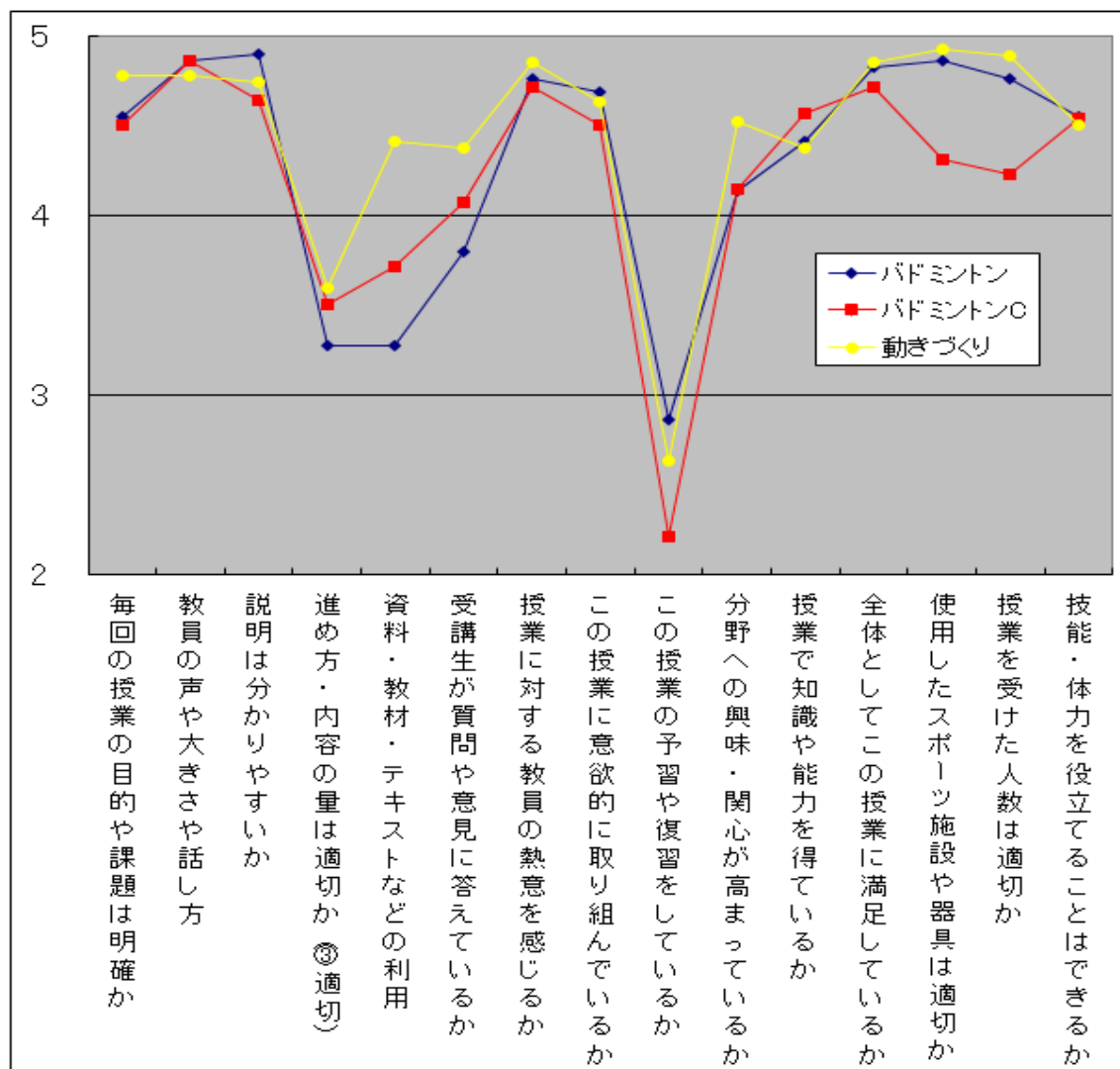


図3 平成26年度2学期授業評価アンケート集計結果と同一種目の比較

図3は、岡豊キャンパス開講のスポーツ科学実技で実施した授業評価アンケートの結果である。バドミントンCを履修した学生の満足度は朝倉開講のバドミントン同様高く、4.71 と良好であったが、説明の分かりやすさで朝倉開講科目に劣っており、改善する必要があると思われる。動きづくりは、予復習以外の各項目とも比較的高い評価結果を示しており、このまま継続して実施していきたい。

また、スポーツ・健康部会では、スポーツ科学実技に関して昨年度までと同様、次のような独自の設問を設定した。

①「授業でを使用したスポーツ施設や用具は適切ですか」

学習意欲を喚起するためには重要な要素である。昨年 4.29 と低い結果だったのは朝倉キャンパステニスコートが未整備であり、この項目で2.94であったことに起因していた。今年度は改修されたため、4.60とほぼ例年のレベルに回復している。岡豊キャンパスのバドミントンCで4.31と、朝倉開講科目に比して低いのはコートが6面しかないことが原因と思われる。それ以外の種目に関して全体の傾向は変わらない(25年度:4.29, 24年度:4.64, 23年度:4.69, 22年度:4.78, 21年度:4.58)。

②「一緒に授業を受けた人数は適切ですか」

授業の成果を上げるためには適正人数がある。多すぎると練習の回数や機会が制限され、技術の向上にとってはマイナスの要因にもなる。平均すると数字の上では今年度も4.65と高い評価を得ている(25年度:4.69, 24年度:4.77, 23年度:4.60, 22年度:4.51, 21年度:4.57, 20年度:4.54,)が、バドミントンCは4.23と低く、体育館の面積に対して履修者数(40名)が多過ぎ、授業に支障があったことを示している。

③「獲得した知識や技能、体力を今後の生活に役立てることができますか」

これについては4.39と、昨年の4.53から下がっているため、生涯にわたっての運動実践や体力づくりの必要性を理解させるように努力したい(25年度:4.53, 24年度:4.51, 23年度:4.50, 22年度:4.37, 21年度:4.45)。

自由記述欄での個別意見も、おおむね上記の好評価が反映されている。目立った意見を以下に、例示しておく。

- 想像以上のことを、このフィットネスの授業を通して学ぶことができた。微灯の中で、マットに横になって、ゆっくりとストレッチして、身体をコンディショニング。自分との対話をすることで、リラックスした気分になった。汗もかけるし、身体が軽くなるような授業でした。普段運動する機会は少ないが、この時間を使って少しでも身体を動かしているのが楽しくできている。後期もやりたいなと思った。(フィットネス)
- 自分の体力に合わせた無理のない範囲で楽しく身体を動かすことができ毎回リフレッシュできました。楽しかったです。また、この授業受けてみたいです。(フィットネス)
- とても楽しいです。みんなが一生懸命取り組めていて良いと思います。休日などを利用していろいろスポーツを試してみるのもいいなと思いました。(バドミントン)
- 大学に入ってからあまり運動していないので、この授業を取って、本当によかったと思います。すごく楽しくて、またこの授業取りたいです!(バドミントン)
- 基礎の打ち方についてももう少し説明してもらえると嬉しかったです。(バドミントン)
- 初心者ですが、とても楽しくバドミントンを学ぶことができました。ありがとうございました。(バドミントン)
- 毎回楽しい授業をありがとうございました。(卓球)
- 身体が動かして楽しかったです!! (卓球)
- 暑い中楽しみながら卓球をすることができました。ありがとうございました。
- 個別の指導もしてくださって卓球が本当に上手になり、楽しかったです。ありがとうございました。(卓球)

- 卓球がとても繊細な力加減が必要な球技であることを痛感した。(卓球)
- 卓球することが楽しかった。前よりうまくなった気がする。初心者だったけどいろいろな技を習得できてよかった。(卓球)
- この授業を取って、とても楽しかったです。(エアロビクス)
- 二重履修でも良いので、またこの授業を取りたいです。(エアロビクス)
- 楽しかった!!! (エアロビクス)
- 毎回とても楽しくおどることができました!ありがとうございました!!
- 身体を動かすことが好きですが、最近時間がとれていなかった。この授業を機に、積極的に身体をうごかしていきたい。(エアロビクス)
- 私はラクロスをしているのですが部活ではできない筋肉運動が楽しくできて良かったと思います。部活にもとり入れたいです!!(エアロビクス)
- テニスコートが部分的にいたんでいる。(硬式テニスA)
- コートが破れている。(硬式テニスA)
- 楽しみながら能力を上げたり知識を増やすことができるので好きです。この授業があるから他の授業も頑張れる!!(硬式テニスB)
- テニス下手だった私が、少しずつ上達することができ、とてもやりがいがある授業でした。ペースもそれほど早くなく、適切な授業の進め方だと思いました。楽しかったです。(硬式テニスB)
- 6月をすぎるととても暑かったです。テニスがうまくなったと思います。また週1の授業で運動不足が解消されました。(硬式テニスB)
- ジャグリングなどで、自分たちの実はできない動きに気づかされました。本当は、できないことはたくさんあるのだと実感できました。(動きづくり)
- 楽しかったです！コツが教えてくれたのでわかりやすかったです。(動きづくり)
- ジャグリングなど、普段触れることのない活動に挑戦する機会があって非常に有意義だった。(動きづくり)
- 体育の授業はあまり好きではなかったけど、この講義は楽しかったです。(動きづくり)
- 楽しかったです。(バドミントンC)

(以上、原文のまま)

12 日本語・日本事情分科会

日本語・日本事情副分科会長 大塚 薫(国際連携推進センター)

1. 活動の概要

日本語・日本事情科目は、第1学期に「日本語Ⅰ」、「日本語Ⅱ」、「日本事情Ⅰ」、「日本事情Ⅱ」、「日本事情Ⅲ」、第2学期に「日本語Ⅲ」、「日本語Ⅳ」、「日本事情Ⅳ」、「日本事情Ⅴ」、「日本事情Ⅵ」が開講されている。

日本語・日本事情分科会では、2006年度～2008年度にわたって分科会独自の形式で授業評価アンケートを全科目の受講学生を対象に実施した。それにより、各授業の自己点検評価活動が行われるとともに、共通教育日本語・日本事情科目のあり方を考えていく基礎資料とすることができた。

それを踏まえて、2009年度以降は、日本語・日本事情分科会では「学期末授業評価アンケート」は行わず、「第Ⅰ期・第Ⅱ期 教育力向上3カ年計画」に基づく「5・15週目アンケート」に関する自己点検評価活動を個人ベースで実施するとともに、日本語・日本事情科目の特性である少人数制授業に焦点を合わせ、FD活動と連動させた「授業ピアレビュー」を中心とする活動を行った。

2014年度は、「第Ⅲ期 教育力向上3カ年計画」の一年目であり、日本語・日本事情分科会でも共通教育が用意した「5・15週目アンケート」を日本語授業で試行的に実施し、授業の自己点検・改善のための資料とした。しかし、日本語・日本事情科目は全10科目を6名の教員で担当している上、今回の試行を実施した科目は一科目のみであったこともあり、統計に値する十分な資料が得られなかったため、ここでは詳細な結果は省略する。

「5・15週目アンケート」を試行的に実施した教員の所感としては、以下の2点を強調したい。

- ① 「5・15週目アンケート」では、質問項目が5つの教育力に基づいて設定されている。しかし、学生アンケートを試行した科目は語学の授業であり演習形式+グループワークで行われているため、教養を高める講義形式の授業とは授業の方式が異なっている。「5・15週目アンケート」の設問1には「この授業で教員は、受講生の学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めていると思いますか」との記述があるが、語学能力向上を目的とする授業にはあまり当てはまらないのではないかと思われる。講義形式の授業と語学の授業とは設問内容を変える等の改善が必要ではないか。
- ② 授業改善アンケートの効果に関しては、「受講生の声によって授業が改善された」と感じる学生が89%であったが、授業改善アンケートへの回答についての負担に関しては、56%が負担に感じると回答していた。受講生に負担のかからない方法での「授業改善アクションプラン」の実施をお願いしたい。

なお、語学等の少人数制授業の場合、毎回の授業のやり取りの中で受講生の声を拾っていき、質問にもその都度回答するという学生へのケアが日々の教育の中で実施されているため、それほど授業改善アンケートの必要性を感じることはない点を付け加えておきたい。

IV FD 部会

1 FD 部会の活動報告

FD 部会長 立川 明(総合教育センター)

26 年度活動の概略

共通教育におけるFD活動は分科会が主体的に行っている。詳細は各分科会報告を参照していただきたい。本年は年度計画に基づくFDの実施検討を行った。また3月に大教部門が行う初年次科目担当者向けFD研修への参加呼びかけを行い、教育学部等から多数の教員が参加した。

年度計画に基づいたFDの企画実施について

本年は年度計価格に基づいて初年次科目担当教員の意見交換会を実施すべく、その可能性について各分科会に検討を依頼した。また1学期、2学期に各一回FD部会を開催し、本年度の計画的FDの実施について依頼した。各分科会のFD企画については、各分科会の報告を参照。

FD部会としては本年新たな取り組みとしてキャリア支援教育科目分科会と協力し、キャリア支援科目でアナウンサーの尾崎 美樹さんを講師にお招きし、キャリア支援のための絵本セラピーを実施する授業参観および終了後の意見交換会を行った。

FD研修の実施

本年は、初年次科目担当者向けに行われる春季FDセミナーにメールで参加を呼びかけたところ、多数の教員が参加した。初年次科目担当者向けグループワークのワークショップでは、主催の大学教育創造部門と調整の上、グループワークの流れを体験する内容を充実し、その際の教員の振る舞いも体験できる内容にした。特に課題探求実践セミナーでは、グループワークの最初の段階でアイデアの発散が十分に行われていない傾向があり、収束の段階でも十分なネゴシエーションがないために収束が不十分であるグループが多くあるようなので、その段階に力を入れるためのワークショップメニューとした。

この他、授業の初回にすべきこととして、オリエンテーション以外に何をすべきかをワークショップで体験した。さらにチームビルディングゲームをしながらファシリテータの体験をし、その体験をふりかえるワークショップを行った。

4 学問基礎論分科会

学問基礎論副分科会長

前西 繁成(土佐さがけプログラム)

12月に学問基礎論に関するアンケート調査を実施し、それぞれの授業内容に関する情報を入力した。次年度のシラバス作成の参考に供するため、2月までに回答のあった内容(医学部、理学部、教育学部、土佐さがけプログラムの1部)を各委員に提供した。アンケートの質問と回答内容は下記のとおりである。

質問内容及び回答	
①貴学部では、シラバス記載前に担当者での打合せをされていますか？	(・はい5 ・いいえ7)
②貴学部では授業開始前に内容や進め方について、担当者での打合せをされていますか？	(・はい5 ・いいえ7)
③貴学部では授業終了時または終了後に内容や進め方について、担当者での打合せをされていますか？	(・はい6 ・いいえ5 ・どちらでもない1)
④上記について「はい」と回答された方は具体的にその方法をお書きください。	
<ul style="list-style-type: none"> ・事前に数回、計画・評価等の検討(教) ・授業を実施しながら、その状況を分野会議等で報告(教) ・授業終了後の(年度末)反省会等(教) ・メールを中心とした日程調整と内容確認(理) ・3名で分担しており、それぞれの内容について調整している(TSP-IEP) ・日程と内容についてはコース教員間の合意と担当によって調整(TSP-LE) ・授業内容は受講学生の意志・希望を考慮した上で担当教員の判断で決定(TSP-LE) ・後半は農学部クラスと合同で行うので、所属生が参加するクラスの担当教員との連絡や連携によって進行(TSP-LE) 	
⑤授業のメインテーマは何ですか？	
<ul style="list-style-type: none"> ・大学生、社会人、あるいはその学問領域における専門家として求められる教養(例:学問とは、方法論(例:レジュメの作成やプレゼンの手法等)の獲得(教)) ・専門領域を学ぶための基礎力の養成並びに知的好奇心の向上(教) ・臨床医学入門(医) ・理学部のコース紹介(理) ・国際人材としての基礎教養(TSP-IEP) ・生物資源、環境保全、生物生産に関する話題提供とグループワークに用いる課題の探求に対する助言(TSP-LE) 	
⑥授業で養成しようとしているものは何ですか(授業のねらい)？ 具体的にお書きください。	
<ul style="list-style-type: none"> ・一般常識の確立(敬語・ノートの取り方・説明の仕方・読書力・文章表現力・発表力等)(教) ・研究の基礎の育成(文献検索の方法・グループ討論・プレゼンテーションの方法・発表方法等)(教) ・専門領域の事象について、学生が自ら実験し、考え、批評し、自分の意見を述べる力の育成(教) ・知的好奇心の向上(教) ・養成というよりは入学後に専門課程の入門編を学ぶ事によって、2年生からの学習に興味を持つこと、ならびにmotivationの維持を目的としている(医) ・高知大学理学部の各コースで何を学ぶことができるかを知り、その中のどのコースで学ぶかを定める(理) ・グローバル社会で必要とされる日本語・英語コミュニケーション力(TSP-IEP) ・リサーチ、グループディスカッションの能力(TSP-IEP) ・課題探求のための課題の設定と選択する能力の開発。そのためのグループワーク(TSP-LE) ・グループの構成メンバーでの対話力、協働力、協調力の開発。そのためのグループワーク(TSP-LE) ・意見を整理し図式化してプレゼンする能力。そのためのグループワーク(TSP-LE) ・他人の意見を聞いて考察し、発想し、質疑応答する能力。そのためのグループワーク(TSP-LE) 	
⑦授業で行っている特記すべきトピックやイベントがあればお書き下さい。	
<ul style="list-style-type: none"> ・演奏会の企画、立案、プレゼンテーション(教) ・学生の体験的な授業を積極的に導入し、専門領域の研究の面白さや奥深さを教員が伝える試み(教) ・グループまたは個人の研究発表(授業の後半)(教) ・理学部のコースをそれぞれの教員が紹介する(理) ・前半はさがけ生の個別授業で、担当教員による研究内容の紹介(TSP-LE) ・農学部生と合同のグループワークと話題提供を行った研究室訪問(TSP-LE) 	
⑧授業のテーマや内容で、授業開始当初から現在まで、変更してきたものがございますか？	(・はい3 ・いいえ8 ・わからない1)

質問内容及び回答	
⑨	はいと回答した方は具体的に変更内容と変更の経緯(理由)をお書きください。
	<ul style="list-style-type: none"> ・発表に向けて学生のスケジュール管理の指導(教) ・剽窃についての具体的な情報提供(問題が発生)(教) ・当初は、医療制度、医学史など医学概論的な内容も含め、これに加えて臨床医学教入門としていたが、その後、別途に医学概論のコースが出来たため、この部分はやめて、臨床医学教入門とこれに関連する医学英語の入門編を含めるように変えた(医)
⑩	担当者ミーティング以外の方法で授業改善を行っている場合は、どのような方法か、具体的に お書きください。
	<ul style="list-style-type: none"> ・授業アンケート(授業評価アンケート)を利用(教) ・分野会議などで新入生の様子を話し合いながら、授業をよりよくしていく方策を議論(教) ・学生の反応、対応を見て、よりよい指導をする(教) ・学生にアンケートを取って、内容の変更をしている(医)
⑪	授業を通じて、学生の変化を感じることができますか？
	<ul style="list-style-type: none"> ・感じる(5人)(内容:やる気、知的好奇心、向上心の芽生え、視野の広がり、観察力、感性の豊かさ等)(教) ・但し、学生のグループによってプレゼンへの取り組み態度等に差が見られる。必要に応じて助言は必要(教) ・グループ間の競争意識をおおることで、学生たちのやろうとする姿勢を引き出すことも必要(教) ・アンケートの自由記載は3-4割くらいしか書いていないが、30%くらいの学生はmotivationの維持に役立ったと書いてきている(医) ・日本語・英語のコミュニケーション力、プレゼンテーション力の向上(TSP-IEP) ・学生間の親近感と対話力の向上(TSP-LE) ・教員との親近感と対話頻度の増加(TSP-LE) ・特に、学生間の情報交換や交流に重要であり、所属生の少ないさきかけによって多くの学生と接することができるグループワークは重要である(TSP-LE)

アンケートの内容から、授業はそれぞれに適した方法で実施されていると判断される。授業改善は、担当者ミーティング以外の方法では、学生アンケートを実施したり、反応を確認しながら授業が実施されている例が見られた。また、授業を通じた学生の変化についても、向上心や競争心の芽生えやモチベーションの維持といった姿勢面の向上に加え、教員との親近感の強化やプレゼンテーション能力の向上に寄与していることが窺えた。

以上

2014年間基礎論 アンケートまとめ

作成者: TSP 前西 誠哉

質問内容	医学部	理学部	教育学部	TSP-国際人材育成	TSP-生命・環境
①医学部では、シラバス記載前に担当者での打ち合わせをされていますか？	はい	はい	(・はい3 (・はい3.5)	はい	はい
②理学部では授業開始前に内容や進め方について、担当者での打ち合わせをされていますか？	はい	はい	(・はい3 (・はい3.5)	はい	はい
③医学部では授業終了前または終了後に内容や進め方について、担当者での打ち合わせをされていますか？	はい	はい	(・はい3 (・はい3.5)	はい	はい
④上記については、どの程度ですか？具体的な方法を教えてください。	メールを中心とした日程調整・内容確認	メールを中心とした日程調整・内容確認	・事前に教回、科面、関係者の検討 ・授業を準備しながら、その方法を分野会議等で報告 ・授業終了後の生徒と教員等	ほぼで分組しており、それぞれの内容について確認している	●日程調整についてはコース教回の内容と担当によって調整 ●授業内容は受講学生の意向・希望を踏まえて担当教員の判断で決定 ●教回と理学部クラスと合同で行うので、所属生が参加するクラスの担当教員と連絡や調整によって実行
⑤授業のメインテーマは何ですか？	臨床検査入門	理学部のコース紹介	・大学生、社会人、あるいはその学習領域における専門家として求められる教養(例: 学問とは、方法論(例: ショウの作成やプレゼン)の手法等の獲得 ・専門領域を学ぶための基礎力の養成並びに知的好奇心の向上	国際人材としての基礎教養	●生物資源、環境保全、生物生産に関する話題提供(グループワーク)を用いる課題の探索に対する助言
⑥授業で達成しようとしているものは何ですか(授業のゴール)？ 具体的に教えてください。	臨床検査入門	基礎から応用まで幅広い専門知識の導入 高知大学理学部の各コースで何を学ぶことができるかを把握し、その中どのコースで学ぶべきかを定める。	・一般教養の確立(例: ノートの取り方、読書の仕方、演習力、文章表現力、発表力等) ・研究の基礎となる論文執筆の方法(グループ討論、プレゼンテーションのスキル、プレゼンテーションの作成やプレゼン)の手法等の獲得 ・専門領域の専攻について、学生が自ら興味、考え、進捗し、自分の意見を述べる力の育成 ・知的好奇心の向上	グローバル社会で必要とされる日本語・英語コミュニケーション能力 リーダー、グループリーダーとしての能力	●理解促進のための課題の設定と選択する能力の養成、そのためのグループワーク ●グループの構成メンバーの役割、協働力、協働力の開発、そのためのGV ●意見を整理・体系化してプレゼンする能力、そのためのGV ●他人の意見を聞いて考察し、発想し、質疑応答する能力、そのためのGV。
⑦授業で行っている練習(例えば、ペーパーワーク)が効果的ですか？	特になし	理学部のコースをそれぞれの教員が紹介する。	・演習会の企画、立案、プレゼンテーション ・学生と教員との授業を積極的に導入し、専門領域の研究の面白さや奥深さを教員が伝える工夫 ・グループまたは個人の研究発表(授業の前半)	特になし	●前半はさががけ生の個別授業で、担当教員による研究内容の紹介 ●後半はと合同のグループワークと問題解決を行った研究室訪問
⑧授業のテーマや内容で、授業開始前から現在まで、変更されたことがありますか？	はい	特になし	(・はい2 (・はい3.6)	はい	はい
⑨はいと回答した方は具体的に授業内容や変更の理由(理由)を教えてください。	当初は、医療系、医学など医学基礎的な内容も含め、これに加えて臨床検査入門としていたが、その後、別途で医学系別のコースが出来たため、この部分はやめて、臨床検査入門だけに絞る医学系別の入門編を含めるように変えた。	特になし	・学系に向けて学生のメタ認知管理の指導 ・判断についての具体的な情報提供(問題が発生) ・授業力、協働力の向上、向上の芽生え、視野の広がりが、(但し、学生が動機づけられ、必要に応じて動機づけが必要) ・グループ間の競争意識を高めることで、学生たちのさらなる進歩を引き出すこと必要	英語、日本語によるプレゼンテーションを通して、論理的思考力、問題解決能力、観察力、独断性を育成する ・外国語習得に必要となるリスニング・スピーチ・コミュニケーションについて学ぶ	
⑩担当者アンケート以外の方法で授業改善を行っている場合は、どのような方法が、具体的に効果的ですか？	学生にアンケートを取って、内容の変更をしている。	特になし	・授業力、協働力の向上、向上の芽生え、視野の広がりが、(但し、学生が動機づけられ、必要に応じて動機づけが必要) ・グループ間の競争意識を高めることで、学生たちのさらなる進歩を引き出すこと必要	特になし	●学生間の協働と対話力の向上 ●教員の最近感・対話力の向上 ●特に、学生間の情報交換や交流に重要であり、所属生の少ない、さががけにて多くの学生と接する機会があるグループワークは重要である。

5 人文分野分科会

人文分野副分科会長 原崎 道彦（教育学部）

FD 部会での審議と活動計画書をもとに、副分科会長から、授業担当教員に対して、今年度の人文分野独自の FD のテーマとして「オーディオ機器を用いた自律的授業改善の試み」を提案し、了承された。その内容、趣旨、実施方法は以下のとおりである。

内容: 教員が IC レコーダーで自分の授業を録音し、授業後にそれを聴き、授業改善のための工夫をおこなう。

趣旨: 授業改善のための取り組みとしては、授業参観や授業評価アンケート等がおこなわれてきましたが、基本的に他者からの評価をもとに授業改善を工夫するという内容になっています。けれども、授業改善は各教員によって自律的になされることが基本だと思われます。教員による自律的な授業改善をうながす取り組みとして、教員が自分の授業を録音したものを聴き、授業改善のきっかけとしようとするものです。

具体的な実施方法: 活動は2学期におこないます。参加する教員に IC レコーダーを渡します。教員には、自分で録音した自分の授業を自分で聴いていただきます。そのうえで、授業におけるどのような改善のポイントを発見することができたか、この方法が授業改善の方法としてどこまで有効と思われたか等をもちより FD 研修会をひらきます。

* 録音データの提出は必要ありません。録音データを消去のうえ IC レコーダーを返却ください。

12月に、人文学部の教員4名と教育学部の教員4名がFD活動にとりくみ、「どのような授業改善につながったか」「この方法が授業改善の方法としてどこまで有効と思われるか」についてレポートを提出した。

1月27日にFD研修会を開催した。授業改善にかかわる成果の報告のあと、FDの方法としての有効性について意見交換をおこなった。「毎年度、継続的におこなう必要のあるものではないが、自分の授業の癖を自覚するうえで有効な手段となりうる」ということを確認した。また、今回は音声のみだったが、映像をとまなうと、授業改善のためのよりいっそうの刺激となる可能性があることも確認された。

7 生命・医療分科会

生命・医療副分科会長 幸 篤武(教育学部)

平成 26 年度 FD の生命・医療分科会 FD 活動は、年度当初の計画に則り実施した。以下にその一部を示す。

【方法】

朝倉キャンパスにて 1 学期に開講された「健康 A」および「健康 B」において授業第 15 回目に 15 の設問と自由記載欄からなる自己点検評価活動用のアンケートを実施した。アンケートの集約結果から課題点と次年度にむけた改善の為の方策を検討し、部会員との共有をはかった。

自己点検評価活動用のアンケート結果より改善に資する項目として

- 15 の設問において、「授業の進み方や内容量は、あなたにとって適切ですか」という質問の評価点は健康 A および健康 B とともに 3.2 点と他と比較して低かった。また「あなたは、この授業の予習や復習をしていますか」との質問の評価点についても健康 A が 2.1 点および健康 B が 2.0 点と低かった。
- 自由記載欄より「手元に資料があるようにしてほしいかった。空欄を埋めるときに、書ききれないことが多々あった」、「スライドをプリントしてくれている回はとてもわかりやすいけど、プリントがなく自分でノートをとる回はスライドの切り替えが早くておいつかない時がある」、「配布資料がないのにスライドが見にくい先生がいらっしまったので、改善すべきだと思います」、「教員によってムラがありますが、スライドが早く進んだり、むしろスライド自体が見づらい場合がある」など授業の進度と関連する記載が散見された(いずれも原文のまま)。

改善のための検討と課題点

授業の進度や内容量に関して：授業内容の改善はもとより、当日の配付資料が無いことにより受講学生は筆記の量が増えてしまい、授業の進度についていけなくなっていることが一因としてあげられる。高知大学教務システム(KULAS)ではイントラネット上に講義資料のアップロードが可能となっており、その活用が改善の一助となると思われる。一方でデメリットとして、学生が講義中にスマートフォンやノート PC 等で講義資料の閲覧を行い、授業の妨げとなり得ることが考えられる。

予習や復習に関して：レポート課題等を用い、予習や復習を促進する必要があるかもしれない。一方で健康 A では受講学生が 200 名を超えていることもあり、レポート等の課題の評価は教員側の負担が増加する。

8 自然分野分科会

スポーツ・健康分科会副分科会長 高田 淳(医学部)

平成 26 年度は、自然分野分科会独自の FD 講演会等は開催しなかった。

分科会長から第 62 回中国・四国地区大学教育研究会の参加報告が行われたほか、各委員が全学あるいは各学部で開催された各種 FD 講演会に参加した。

11 スポーツ・健康分科会

スポーツ・健康分科会副分科会長 常行 泰子(教育学部)

FD 部会の活動計画書をもとに、教育学部スポーツ・健康分科会独自の FD 企画を検討した結果、スポーツ実技「フィットネス」フォローアップ教室を開催した。また、当初の計画では「スポーツ科学講義 A」の受講者を対象とした質問紙調査を実施する予定であったが、これに加え、「スポーツ科学概論」の受講者にも質問紙調査を実施した。

●共通教育授業「フィットネス」履修者に対する授業後のフォローアップ教室開催

平成 25 年度と同様に、共通教育授業終了後の希望学生に対してフォローアップ教室を開催した。科研助成事業における研究協力者の地域住民と共にフィットネス教室の運営サポートも行いながら、スポーツ実技を主体的に行いました。

学生は、授業履修者以外の学生を連れてくるなど、非常に意欲的に参加しておりました。また、地域住民の方々にも好評で、放送大学の学生も参加するなど受講者の数は増加傾向にあります。



●共通教育授業「スポーツ科学講義 A」履修者に対する質問紙調査

単位修得や全学的に実施しているアンケートとは別に、教員が独自に作成した質問紙調査を行いました。本年度は、英語の学力について不安を抱いている学生が多い一方で、体育授業における英語導入のニーズがあったことから、これらの項目で構成した質問紙調査を 2014 年 12 月から 2015 年 1 月にかけて実施し、回収、分析しております。

調査項目は、個人的属性 6 項目(性別・年齢・所属学部と年次・課外活動・進路希望・英語に関する所有資格)、運動・スポーツに関する有能感、英語に関する有能感、英語で行われる体育実技授業の履修ニーズ及び理由と種目、英語で行われる体育講義授業の履修ニーズ及び理由、自由記述である。紙面の都合上、本調査の内容は別途研究論文等を通じて報告する予定である。

V 広報部会

1 広報部会のまとめ

広報部会長 野角 孝一(教育学部)

1. 本年度広報部会の構成

部会長:野角孝一(教育学部)

緒方賢一(人文学部) 岩城裕之(教育学部) 石塚英男(理学部)

山脇京子(医学部) 原 忠(農学部)

2. 本年度部会の活動方針

広報誌「パイプライン」の発行(年2回)、電子化した「パイプライン」の読まれ方に関する調査方法の検討を行う。

3. 本年度部会の活動報告

3-1)概要

広報部会活動計画についてメール会議で開催した。

電子化した広報誌「パイプライン」の読まれ方について、Google アナリティクスによってアクセス数を確認し、分析検討した。

「パイプライン」第43号を6月に、第44号を平成26年2月に発行(掲示)した。また、第45号の編集作業を行った。

3-2)部会議事と関連会議事項

・第1回部会(メール会議) 平成26年6月3日～6月9日

1. 平成26年度活動計画について

・パイプライン発行にあたって、44号・45号の発行内容と作業内容を網羅した計画案を作成し、編集作業の概要を提示し、了承された。

・従来のパイプラインでは偶数号(4件)と奇数号(2件)を比べると、記事の内容の分量にばらつきがある。そこで例年、偶数号に載せておりました学生委員会活動報告を奇数号に移動させる案を提示し、了承された。

※7月22日第2回共通教育実施機構会議で報告。

・第2回部会(メール会議) 平成27年3月2日(月)～3月6日(金)

1. 「パイプライン」第45号の発行について

偶数号は毎年1月～2月上旬に発行されており、試験や成績期処理の時期と重なるため、閲覧回数は伸びない傾向にある。そこで次年度の第46号は11月月中の発行を目指し、原稿の締め切りを9月末とすることが了承された。

2. 本年度活動報告書について

原案通り、了承された。

※ 月日第 回常任委員会・3月24日 第7回共通教育実施機構会議で報告。

3-3)本年度の審議内容の概要

3-3-1)「パイプライン」発行業務の自己点検・評価について

「パイプライン」の読まれ方を、Google アナリティクスによるアクセス数の調査で実施した。第44号の発行直後に300回程度、第44号の発行直後に100回程度訪問があった。メールマガジンの効果である程度読まれたことがわかり、電子化による改善がある程度実現されたと判断した。偶数号である第44号の閲覧回数は奇数号と比較すると少ない。

3-3-2)「パイプライン」の編集・発行について

- ・前年度に編集を終えていた第43号を6月にHPに掲載した。
 - ・第44号を平成27年2月にHPに掲載した。
 - ・特集は分科会で、ローテーションに従って[キャリア形成支援科目 スポーツ・健康]であった。
次年度以降:[人文 自然]→[大学基礎論 課題探求実践セミナー 学問基礎論]→[社会 生命・医療]→[外国語 日本語・日本事情](ただし、教養の頁等とのバランスを考慮して変更する可能性があることが了承されている)。
 - ・教養の頁は、ローテーションで教育部であった。
次年度以降:農→人→理→医→教となる
 - ・FD 部会報告
 - ・共通教育実施機構会議からのお知らせ
-
- ・第45号の編集を行った(発行は次年度4月)。
 - ・特集は、共通教育科目のローテーションで「初年次科目」であった。
 - ・自己点検・自己評価部会報告
 - ・学生委員会
 - * 原稿料は、学生委員会活動に対する謝金という形で支出する。

4. 次年度(以降)の課題

- ・「パイプライン」編集・発行の時期や編集作業のあり方の検討(継続)。
- ・偶数号は毎年1月～2月上旬に発行されており、試験や成績期処理の時期と重なるため、閲覧回数は伸びない傾向にある。そこで次年度の第46号は11月月中の発行を目指し、原稿の締め切りを9月末としたい。
- ・読まれ方調査を毎年継続していく必要がある。

VI カリキュラム等開発部会

1 カリキュラム等開発部会のまとめ

カリキュラム等開発部会長 石筒 寛(人文学部)

カリキュラム等開発部会の活動目標

共通教育にかかわる新規のカリキュラムおよび授業の開発

平成 26 年度の活動総括

ジェネリックスキル測定テスト (PROG) の実施

協働実践分野の授業実施

活動報告

ジェネリックスキル測定テスト (PROG) の実施

4/9 (医学部除く 1 年生及び 3 年生)、4/11 (看護学科 1 年生)、4/28 (医学科 1 年生)

平成26年度ジェネリックスキルテスト(PROG)受験者数

所属		学年	受験者数	学生数 (H26年度入学者) ※4/1現在
人文学部	人間文化学科	3	1	—
	社会経済学科	3	2	—
計			3	—
教育学部	生涯教育課程	3	6	—
計			6	—
理学部	理学科	3	4	—
	応用理学科	3	8	—
計			12	—
農学部	農学科	3	8	—
計			8	—
人文学部	人間文化学科	1	7	92
	国際社会コミュニケーション学科	1	27	89
	社会経済学科	1	60	121
計			94	302
教育学部	学校教育教員養成課程	1	102	102
	生涯教育課程	1	66	71
計			168	173
理学部	—	1	240	276
計			240	276
医学部	医学科	1	109	110
	看護学科	1	60	60
計			169	170
農学部	農学科	1	167	181
計			167	181
TSP	グリーンサイエンス人材育成コース	1	5	5
	国際人材育成コース	1	9	9
	生命・環境人材育成コース	1	2	2
計			16	16
合計			883	1,118

H26年度入学者数(学部1年生) 計 1,118名
 上記のうちPROG受検者数 計 854名
 H26年度入学者(学部1年生)に占める受検率76.4%

協働実践分野の授業実施

協働実践自己分析（教養科目・社会分野）の実施。

課題探求型授業の実施および授業改善

総合教育センター社会協働教育部門と UBC（KICS 化事業）が連携し、地域課題解決活動参加型授業プログラムの開発に取り組み、「課題探求実践セミナー（地域協働入門 V）」を、第 1 学期に実施。